

研究紀要



第 33 号

序・・・・・・・・・・・・・・・・	校長 新納 雅 樹
平成 28 年度県総合教育センター研究提携報告—全体まとめ—及び各科の報告	
数学科学学習指導案・・ 新規採用 3 年目研修研究授業実施者 教諭 福山 健太郎	
保健体育科学学習指導案・新規採用 3 年目研修研究授業実施者 教諭 須貝 佳奈子	
音楽科 2 年生研修旅行報告(音楽科)・・・・・・・・・・	音楽科 2 年担任 宮原 真紀
普通科 2 年修学旅行報告・・・・・・・・・・・・・・・・	2 学年引率者 鶴田美里映
美術科 1 年風景画合宿報告・・・・・・・・・・・・・・・・	美術科担当者 前村 卓巨
英語コース語学研修実施報告・・・・・・・・・・・・・・・・	英語科担当者 鶴田美里映
書道コース夏季宿泊研修実施報告・・・・・・・・・・・・・・・・	書道科担当者 鈴木 寛治
平成 28 年度校内研究授業・研究発表の記録 ・・・・・・・・	教 頭
美術科 2 年生研修旅行報告(美術科)・・・・・・・・・・	美術科 2 年担任 上木原堅一

平成 28 年度

鹿児島県立松陽高等学校

2014年のノーベル物理学賞の赤崎勇氏、天野浩氏、中村修二氏の3氏に続き、2015年はノーベル生理学医学賞を大村智氏がノーベル物理学賞を梶田隆章氏が、そして、2016年には、ノーベル生理学医学賞を大隅良典氏が受賞するという素晴らしい出来事がありました。

日本人が3年連続してノーベル賞を受賞したということは、まさに快挙です。

また、2001年から2016年まで打ち上げられた日本のロケットの成功率は98%で、30回連続で成功しました。さらに、理化学研究所のチームが新元素を発見し、ニホニウムと命名されました。日本の科学技術の水準が世界の国々の中でトップレベルであるということを証明した喜ばしいでき事でした。

現在、文部科学省は、これからも世界のリーダーになるような人材を輩出するため高校、大学の教育改革を急速に進めようとしており、これまでの改革の中で最も大きな改革になろうとしています。2019年度にセンター試験を廃止し、2019年度から高校基礎学力テストを、2020年度から大学入学希望者学力評価テストを実施し、2次の各大学による個別試験では小論文や面接、集団討論、部活動や課外活動の記録など、高校時代にどのような経験したかを重視したり、「記述式」や「論述式」などの問題形式にするように提言しています。つまりこれからは「知識」や「技能」だけでなくそれらを活用した「思考力」「判断力」「表現力」など応用力を重視するようになっていくということです。

このような状況の中で、我々教員は、上記のような能力をもった生徒を育成できるだけの指導力を備えていかなければならなくなります。そのためには、教員自身が自己研鑽によって生徒に、ただ、「知識」「技能」を伝授するだけでなく、授業の中で「思考力」「判断力」「表現力」などの応用力を使う場をこれから設けていく必要がでてきます。これがアクティブラーニングです。アクティブラーニングとは文部科学省によると「教員からの一方的な講義形式の教育とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授、学習方法の総称で、学修者が能動的に学習することによって、認知的、倫理的、社会的能力、教養、知識、経験を含めた汎用的能力の育成を図るというもので、発見学習、問題解決学習、体験学習、調査学習等が含まれるが、教室内でのグループディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等も有効なアクティブラーニングの方法である。」というものです。今後、私たちはこのアクティブラーニングについて詳しく研究し、実践していくことが重要になってきます。日々是研鑽です。

今回、平成28年度の研究紀要を発刊することになりました。内容は教育センター研究提携報告、研究授業や指導案、音楽科や美術科の研修旅行報告、美術科の風景画合宿報告、英語コース語学研修実施報告、書道コース夏季宿泊研修実施報告など一年間のそれぞれの職員の研究成果がにじみでています。我々は教員である以上は、生徒の指導のために日々是研鑽しかありません。この紀要は研鑽の賜といってもよいと思います。今後、この紀要がアクティブラーニングの研究発表の場にもなれたらと考えます。

最後に、執筆された先生方並びに、編集にあたられた先生方に感謝申し上げます。

多くの皆様にお読みいただき、ご指導ご助言をいただきますようお願い申し上げ、発刊にあたっての挨拶とします。

平成27～29年度 鹿児島県総合教育センター提携研究 平成28年度研究報告

鹿児島県立松陽高等学校

I 研究主題

思考力・判断力・表現力の効果的な育成を目指した授業改善
—アクティブ・ラーニングの実践を通して—

II 研究主題設定の理由

1 学習指導要領の趣旨から

学習指導要領の取組を推進する中で、「生きる力」の育成、とりわけ「確かな学力」の要素である基礎的・基本的な知識の習得とその活用を図り、思考力・判断力・表現力を育成することは喫緊の課題である。

2 平成26年度までの研究課題から

思考力・判断力・表現力の育成は、平成26年度までの基礎的・基本的な知識や技能の習得に関する研究を更に発展させて行うことのできる研究内容であり、授業改善を通じてその具体化を図れるものである。また、生徒が主体的・能動的に学ぶ姿勢を涵養することは、これまでの研究で明らかになった本校の課題である。

3 研究推進の立場から

アクティブ・ラーニングはこれまで大学等で取組が進んでいる学習・教授法の一つだが、近年中等教育での取組も関心が高まっており、全国的にも先進的な研究となることが期待される。

「アクティブ・ラーニング」とは教員の一方的な講義形式とは異なり、学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。発見学習・問題解決学習・体験学習等が含まれ、教室内でのグループワークなども有効なアクティブ・ラーニングの方法。

III 研究の構想

1 研究期間

平成27年度～平成29年度（3年間）

2 研究内容概略

- (1) アクティブ・ラーニングについての調査研究
- (2) いくつかの単元や分野を取り上げた、本校生徒に身に付けさせたい思考力・判断力・表現力の検討
- (3) 課題発見や課題解決を促す問いや活動の検討
- (4) 学んだことを定着させるための、効果的な振り返り活動の検討
- (5) 思考力・判断力・表現力の効果的な育成のための教材やワークシートの開発
- (6) 言語活動等を充実させ、協働的な学びを取り入れた学習活動の検討
- (7) (1)～(6)の各教科における検証、次年度への継続

3 3年間の研究計画

年度	主な内容
平成 27 年度	・ アクティブ・ラーニングについての調査研究（全国での取組の調査と本校での実態調査）を行い、本校職員へ情報提供を行う。 ・ 本校生徒に身に付けさせたい思考力・判断力・表現力について検討する。 ・ アクティブ・ラーニングを実験的に導入し、内容の検証を行う。 ・ 研究内容に基づいた授業を公開し、実践事例や研究内容を発表する。
平成 28 年度	・ 1年目の研究を基に、研究内容を具体的に精査し、更なる授業改善を図る。 ・ 本校生徒に身に付けさせたい思考力・判断力・表現力について検討する。 ・ アクティブ・ラーニングの実践事例を整理し、本校職員間で共有する。 ・ 研究内容に基づいた授業を公開し、実践事例や研究内容を発表する。
平成 29 年度	・ 研究成果について検証し、研究のまとめを行う。 ・ 研究内容に基づいた実践授業を公開し、実践事例や研究内容を発表する。

4 研究の体制

校務分掌上では、教務部の研究開発係が総合教育センターと提携しながら研究を行う。係は世話係2名と各教科1名（保健体育・家庭・情報科を除く）の9名からなる。研究の体制は、研究開発係が教務部、進路指導部、各種委員会の学力向上対策委員会、各教科と連携を図りながら研究を進めていく（図1）。

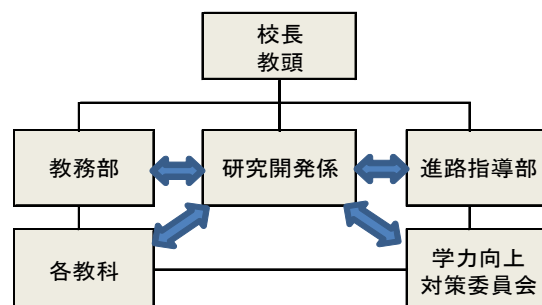


図1 研究体制

5 研究提携における教科研究概要について

(1) 3年間の各教科研究テーマ一覧

国 語	思考力・判断力・表現力の効果的な育成を目指す国語科指導法の研究 —アクティブ・ラーニングを取り入れた授業実践を通して—
地理歴史 公 民	思考力・判断力・表現力を育成する授業実践の研究 —課題解決学習を通して—
数 学	アクティブ・ラーニング型授業による数学的な思考力・表現力の育成に関する研究
理 科	科学的な思考力・判断力・表現力を育成する授業改善 —課題解決的な観察、実験を通して—
音 楽	アクティブ・ラーニングを取り入れた音楽科学習指導法の研究 —思考を活性化する学習形態の工夫—
美 術	アクティブ・ラーニングを取り入れた美術科学習指導法の研究 —表現及び鑑賞の学習に言語表現を取り入れた学習形態の工夫—
外国語	Expressing ideas through reading and listening actively

(2) 本年度の教科研究の概要一覧

国 語	○ 思考力・判断力・表現力の評価規準の再検討 ○ 単元目標に応じたアクティブ・ラーニングの実践 ○ 思考力・判断力・表現力の評価と授業改善
地理歴史 公 民	○ 課題解決学習を取り入れた授業の実践と評価の工夫 ○ 生徒の学習に対する意識調査の実施と結果の分析 ○ 課題解決学習の授業による思考力・判断力・表現力の向上についての検証
数 学	○ 習熟度別編成クラスにおけるA L型授業の実践及びその効果、課題の明確化 ○ リフレクションの在り方の研究
理 科	○ 本校生徒に身に付けさせたい思考力・判断力・表現力の吟味 ○ 1年目の研究成果の検討、授業方法の改善 ○ アクティブ・ラーニングを取り入れた問題発見や課題解決を促す観察、実験の検討・実践
音 楽	○ 主体的・協働的な活動を取り入れた授業実践 ○ 能動的な学習場面設定と実践的な指導法についての研究
美 術	○ 題材や生徒の学習状況に合わせたアクティブ・ラーニングの研究 ○ 造形的要素や思いを言語化することや学習形態についての調査研究
外国語	○ 技能統合型およびアクティブ・ラーニングの要素を取り入れた授業実践 ○ 読んだり聞いたりしたことをもとに書く力を効果的に育成する指導法の検討

IV 本研究の内容と成果・課題

1 他県における先進校視察の成果

本年度は、アクティブ・ラーニングを取り入れた授業改善を推進している4校*を訪問して、授業参観や質疑応答を通して様々な示唆をいただいた。以下にその概要を報告する。

(*福岡県立北筑高等学校、福岡県立折尾高等学校、広島市立美鈴が丘高等学校、広島県立安芸高等学校)

(1) 指導の工夫について

ア 生徒に対するオリエンテーション

授業にアクティブ・ラーニングを取り入れるに当たって、その目的を事前に説明する機会を設けることは、生徒の不安感を解消する意味が大きい。同時に、目的を明確にすることで、アクティブ・ラーニングによる学習効果を上げることにもつながる。

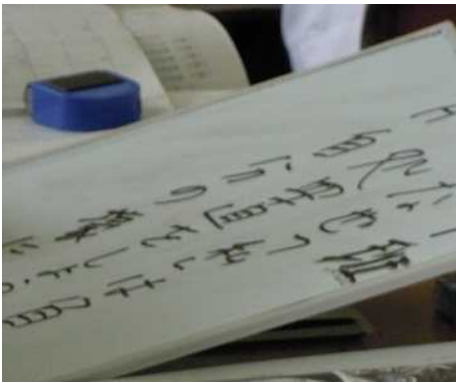
(例) 折尾高校では、「折尾アクティブ・ラーニングについて」という生徒向けの紹介スライドを作成し、オリエンテーションに活用している。

イ 教具や機器の配備

どの学校でも見られたのが、A3サイズの磁石付きホワイトボードで(全学級とLL教室に10枚ずつ備えるなど)、プロジェクターとスクリーン、あるいは電子黒板を常設してある教室も多かった。授業のたびに機器を持ち運ぶよりも、機器がある教室へ移動する方が利便性は高い。また各階や各棟にあることで、その利便性はさらに向上していた。今後も空き教室を改装して整備していく計画であるという。

(例) 美鈴が丘高校には通称「AL教室」が一室作られ、LL教室にもプロジェクターとスク

リーンを常設している。習熟度別クラスが3展開であるため、3部屋は用意していきたいとの話である。



(ホワイトボードに発表内容を書いている。)



(プロジェクター・スクリーンを常設している。)

(2) 評価について

ア ICEルブリック（評価指標）の作成と活用

多くの学校がICE*ルブリックの作成と活用を進めている。(*ICE＝I:基礎知識, C:知識間のつながり, E:知の応用) 単元ごとの評価指標設定や、考查問題の改善などである。

(例) 安芸高校では、全教科に対して、考查問題にICEルブリックのE問題を一つは設けるよう呼びかけている。広島県では、平成30年度からは全ての学校でのICEルブリック作成が目指されているとのことである。

イ リフレクション（自己評価）の活用

評価において、教師からの評価に加えて、生徒自身の評価やグループ内の相互評価を生かしている。生徒が提出する課題にも自己評価表を付けて、取り組みの状況を振り返らせるという工夫がされていた。しかし、評価の基準や方法については、まだ課題が多い。

(例) 安芸高校の国語科では、授業初めに「ALリフレクションカード」で前時を振り返らせる。自分ができたことにチェックを付けたリ、できなかったことを記述したりする形式である。「できたこと」は「理解」に限らず、様々な「学習活動」についても問われている。

(3) 職員研修や校内連携について

ア 職員研修

多くの学校が大学から講師を招いて研修会を行ったり、大学の授業を実際に参観したりという形で、職員全体でアクティブ・ラーニングについて研修を重ねている。各種セミナーへの参加や、他校との研究協議も盛んな様子が見ええた。

(例) 北筑高校では、県の研究指定校として、アドバイザー（福岡教育大学の先生）による講義や、研究授業・研究協議会（年に各2回）など、様々な機会に研修を深めている。

イ 校内連携

職員研修会だけではなく、週に1回は研究推進会で情報共有を図ったり、日頃から教科内で気軽に意見交換・授業参観を行ったりするなど、協力して授業改善に取り組むための工夫がうかがえた。

(例) 折尾高校では研修係が「AL通信」を発行して、導入した教具や機器の活用方法などを広く知らせることで、アクティブ・ラーニングへの関心を喚起し、機器活用を促進している。

2 各教科の研究（詳細は各教科資料及び分科会資料）について

3 年テーマの2 年目として、各教科で行われた実践をまとめると主に以下の5 点になる。

- | |
|---------------------------------|
| (1) 本校生徒に身に付けさせたい思考力・判断力・表現力の測定 |
| (2) 生徒実態把握のためのアンケート調査（意識調査等） |
| (3) アクティブ・ラーニング型授業の研究，実践 |
| (4) 授業で使用する教材やワークシートの作成，改善 |
| (5) 評価規準の作成 |

特に「(3) アクティブ・ラーニング型授業の研究，実践」は全教科で積極的に行われている。以下に授業内容を抜粋したが、いずれも協働的な学習の場面を設定することによって、生徒の主体性を引き出すこと、また、「思考力・判断力・表現力」を伸ばさせることを図って工夫されている。

例えば、地歴公民科では、課題解決学習を継続的に取り入れることで、生徒の主体的な学習活動を促している。また、英語科では、ペアで説明し合ったり、テーマに沿ってプレゼンテーションを行ったりと、技能統合型の授業を実践することで生徒の英語学習に対する意欲を喚起している。

以下は本年度の具体的授業内容の一例と教科研究成果の一覧である。詳細は教科資料を参照されたい。

教科	具体的授業内容の一例	指導内容・成果
国 語	様々な単元で協働学習の場を設定して、自己を表現する学習活動	・ 様々な単元で協働学習の場を設けることで、自己を表現することが習慣化し、スムーズな活動ができている。
地理歴史 公 民	グループで課題を解決したり、事象の原因や影響を考察したりする学習活動	・ 単元の中に課題解決学習を計画的・継続的に取り入れていくことで、生徒の主体的な学習活動が習慣化されてきた。 ・ 課題解決学習における協働的な課題設定の手順を明らかにできた。
数 学	グループ・ペア活動によって思考を練り上げたり、深めたりする学習活動	・ 上位・中位クラスでは、グループ、ペア等の活動により思考の練り上げや深まりがみられ、一定の学習効果がある。 ・ 上記の学習活動によってコミュニケーション能力も高まる。
理 科	観察・実験・演習などにおいてグループで課題解決に取り組む学習活動	・ 観察、実験だけでなく、演習等、適宜グループ活動を取り入れることで、生徒同士が協力して課題解決をしようとする姿勢が見られるようになってきた。
音 楽	生徒が興味・関心に基づいて課題を設定し、グループで発表資料を作成する学習活動	・ 学習内容や学年に応じたアクティブ・ラーニングに取り組む活発な授業への取り組みがみられるようになった。 ・ 生徒同士がよりコミュニケーションがとれるようになり気付きも多くなった。
美 術	生徒同士で意見を交換して、新たな発想を共有する学習活動	・ 学習目標や計画、成果物といった学習の概要を自ら考え制作を行うことで、能動的に学習に取り組み、計画的に制作を行うようになった。 ・ 生徒同士で意見を交換し、新たな発想を共有することで、高次な学習が行えるようになった。

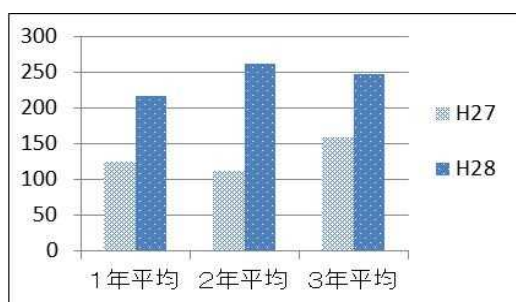
外国語	ペアで意見を交換したり、問題を出して説明をし合ったりする学習活動 ・ 各学年やコースで技能統合型の授業を実践し、協働的な学習の技法を取り入れる際に工夫すべきことを確認できた。 ・ 読んだことをもとに書く力の評価規準について、本校で開発した技能統合型テストの結果やアンケートをもとに検討した。
-----	---

3 本研究による生徒の変容の検証（アンケート調査等の分析）

(1) 生徒の生活面や進路に対する意識について

ア 自宅学習時間調査を全校生徒を対象で7月に実施し、その結果を昨年度と比較した。

本校は部活動が盛んであり、80%の生徒が部活動に所属している。さらに遠方よりJRで通学する生徒も多く、生徒は概して自宅で過ごす時間が短く、十分な宅習時間の確保が厳しい。しかし、図2、図3に示す通り、全ての学年において、昨年度より自宅学習時間が向上しているという結果が得られた。これは、昨年度との調査期間の違い（大雨の影響により今年は期末考査と自宅学習調査の時期が一部重なった）も理由の一つとして考えられるが、昨年度10月や1月にも前年度より自宅学習時間が増えており、本校での授業改善が生徒の自宅学習時間の増加につながっていると考えられる。



(分)

図2 自宅学習時間調査（休日1日あたり）

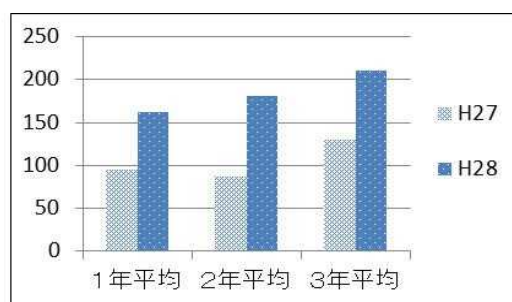


図3 自宅学習時間調査（平日1日あたり）

イ 進路希望調査を全校生徒を対象に9月に実施し、その結果を昨年度と比較した。それによると生徒の進路希望に大きな変容は見られていない。生徒の進路希望は四年制大学・短期大学・専門学校・公務員などだが、四年制大学への進路希望者が毎年全体の6割程度で、生徒の多くは大学進学を目指している現状に変わりはない。

(2) 生徒の学習全般に対する意識について（本年度全校生徒を対象としたアンケート結果分析）

2・3学年の結果を、昨年度の同じ調査の結果と比べると（1年は本年度のみ）、学習が自分の将来につながるという意識が高まっている（図4）。また「学ぶことは楽しい」と回答している生徒は昨年度と比べて増えている（図5）。しかし、どちらも1年次の値は、上級生に比べて低い。1年次において、いかに学ぶ喜びを感じさせるか、またその学びが将来につながるという意識をどのようにしてもたせるのか、ということは引き続き本校の課題であると言える。

(%)

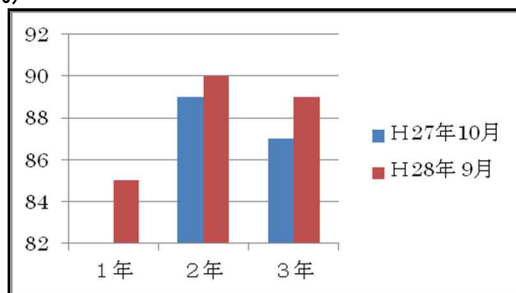


図4 調査項目「今学ぶことは自分の将来のために必要だと思う」

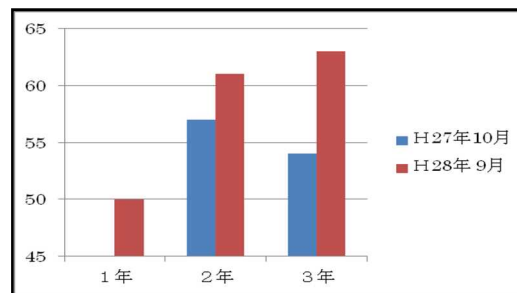


図5 調査項目「学ぶことは楽しい」

(補足：図 4， 5 について)

項目に対して生徒は4段階（①自分には全く当てはまらない～④自分によく当てはまる）で回答した。図 4， 5 の数値は、「③自分に当てはまる」と「④自分によく当てはまる」の合計（％）である。調査は、全校生徒を対象に9月に行った。最終的に欠損値がある（答えていない項目がある）ものを省いた860人（1年生296人・2年生279人・3年生285人）を分析の対象としたものである。

(3) 生徒の授業に対する意識について（本年度全校生徒を対象としたアンケート結果分析）

ア 授業での表現活動について

アメリカのミネソタ大学におけるアクティブ・ラーニングの規準を参考にして、表現活動に関して5項目の質問を行った。昨年度と比べ大きな変化はない。学年間での目立った相違点もなかった。理由として、まだ授業改善が十分でないとか、教師が授業改善を行ったとしても生徒はその目的や活動内容を理解していない、といった理由が考えられる。生徒へのシラバスの提示、最終的な評価規準の明示などが足りない可能性もある。今後改善していきたい。

表現活動に関する質問項目	よく当てはまる・当てはまると答えた生徒の割合 ※（ ）内はH27年10月
これまで学んだことと、新しく学習する内容を関連付けながら、目的をもって聞く	52.0% (51.4)
新しく学習した内容を、自分の言葉で説明する	33.1% (36.1)
新しく学習した内容を要約したり、ノートにまとめたりする	64.5% (65.8)
学んだことを定着させるため、授業のポイントを他の生徒に説明する	24.9% (27.5)
学んだことを定着させるため、授業の最後に、学んだことを使って教え合う	22.9% (24.9)

イ ペア（2人）・グループ（3人）での活動について

よい協同学習の5つの要素（Johnson, Johnson & Smith, 1991）を基に5項目の質問を作成した。すべての項目において7割以上の生徒が「あてはまる」と答えていることから、本校においては、ペア・グループ活動は非常に有効な学習形態であると言える。

協同学習の五つの要素	質問項目	よく当てはまる・当てはまると答えた生徒の割合 ※（ ）内はH27年10月
肯定的相互依存	ペア・グループ活動をすれば、学んだことを理解しやすい	76.2% (80.4)
促進的相互交流	ペア・グループ活動では、お互い助け合ったり教え合ったりする	87.9% (89.4)
個人と集団の責任	ペア・グループ活動では、自分の役割や責任を果たそうとする	77.7% (76.6)
集団作業スキルの発達	ペア・グループ活動がうまくいくように、相手の発言をしっかりと聞き、自分の意見や考えも表現できる	77.9% (76.3)
グループの改善手続き	ペアやグループで協力すれば、少し難しい課題にも挑戦できる	83.6% (82.6)

一方、質問項目「ペア・グループ活動をすれば、学んだことを理解しやすい」や「ペア・グループ活動では、お互い助け合ったり教え合ったりする」に対して、自分に当てはまると答えた生徒が減っている。そのように答えた生徒には、他者とのコミュニケーションをとるのが苦手な生徒が多いようである。あるいは、ペア・グループで活動する中で、特定の生徒に負担がかかるなどして、かえって当人の学習が妨げられるというような経験が少なくないのではないかと推察する。そのような生徒に対して、「人に教える活動や、言葉で説明をすることによって自分の学習が深まる」という利点を実感させたり、「このような手順で話せば相手に伝わりやすい」といった表現の型やヒントを与えてから表現活動をさせるよう配慮したりするなど、教師の的確な手立てが必要だと考えられる。

(4) 本校生徒の現状把握および分析のまとめ

昨年度と同じ調査を実施することで、生徒の学習への意識がどのように変化しているかを検証した。昨年度と比べてアンケート結果に大きな変化は見られなかったが、生徒の多くは協働的な学習を好ましいものと捉えている。今後継続して授業改善を実施し、生徒の変容を再度調査したい。

また、本校で取組を進める際には、生徒のコミュニケーションスキルを向上させ、協働学習が促進するよう配慮したり、学習課題を明示し、その解決に向かってきめ細やかな支援をしたりすることが必要ではないかと考えられる。生徒の実態に合った工夫を行っていき、更なる協働的な学びが授業で行われるような手立てを行っていきたい。

4 参加型学習に対する教員の意識について（昨年度本校教員を対象としたアンケート結果分析）

(1) 調査概要について

本調査は、平成 27 年 7 月から 9 月にかけて東京大学総合教育研究センター中原淳研究室と一般財団法人日本教育研究イノベーションセンターが共同研究として実施した「高等学校における参加型学習に関する実態調査」の一部（本校研究テーマに沿う部分）を本校センター提携担当教科（国語・地歴公民・数学・理科・音楽・美術・英語）の教員 48 名に対して実施したものである。平成 28 年 1 月に実施した。

*本調査では「アクティブ・ラーニング」という語のイメージによる偏りを避けるため、「参加型学習」という語を用いている。「参加型学習」に関しては「学習者の能動的な学習への参加と思考を促す教授・学習法の総称」と定義し、「アクティブ・ラーニング」「AL」と同義で用いているとしている。

(2) 調査結果

ア アクティブラーニングを取り入れた授業により実感した効果について

(a) 本校職員の調査で値が高かった項目について

（5 あてはまる、4 ややあてはまる、3 どちらともいえない、2 あまりあてはまらない、1 あてはまらない）

本校職員がALを取り入れた授業により実感した効果（値の高い順に）	本校教員の平均値
生徒が他者と一緒に学ぶ楽しさを理解するようになった	3. 6
生徒と教員間のコミュニケーションが深まってきた	3. 5
生徒が自分の考えを深められるようになった	3. 4
生徒が自分の考えを言語で表現する力が高まった	3. 4
生徒が主体的に考え、動き、課題解決できるようになった	3. 3
生徒に主張・傾聴・討論などのコミュニケーション能力が身についた	3. 3
普段は消極的な生徒が、授業の中で積極的に関わられるようになった	3. 3

(b) 本校職員の調査の値と全国の調査の値に差があった項目について

ALを取り入れた授業により実感した効果	本校	全国
生徒の教科を超えた知識や理解の融合が進んだ	2. 9	3. 2 5
途中であきらめず最後まで粘り強く取り組めるようになった	3. 0	3. 3 1
生徒が適切に情報を収集し、選択・活用できるようになった	3. 0	3. 3 0

イ 参加型学習を実施したことで生じた困難や課題、不安について (21 項目中の順位比較)

(5 あてはまる, 4 ややあてはまる, 3 どちらともいえない, 2 あまりあてはまらない, 1 あてはまらない)

内容, () 内は本校平均値	順位	
	本校	全国
授業の進度が遅くなる (3.8)	1	2
参加型学習になじめない生徒やついてこれられない生徒がいる (3.6)	<u>2</u>	<u>7</u>
授業前後の教員の負担が増加する (3.6)	2	1
授業内容に関係のない生徒の私語が増える (3.4)	<u>4</u>	<u>1 1</u>
授業の時数が足りない (3.4)	4	3
各教員の授業の進度にばらつきが生じる (3.3)	6	5
生徒の学習活動を客観的に評価することが難しい (3.3)	6	4
授業の教員スキルが不足している (3.3)	6	8
必要な施設・設備が足りない (3.3)	6	7

ウ イで答えた困難や課題、不安をどうすれば乗り越えることができるかについて (() 内は平均値)

(5 あてはまる, 4 ややあてはまる, 3 どちらともいえない, 2 あまりあてはまらない, 1 あてはまらない)

1 教員の他の事務的作業を軽減する (4. 0)
2 授業準備に時間をかける (4. 0)
3 授業方法を工夫する (授業に参加しないことで学習に支障がでるような設計など) (3. 9)
4 客観的な評価が可能となるよう評価方法を工夫する (3. 9)
5 校外での研修会や勉強会への参加を奨励する (3. 9)
6 校内での研修会や勉強会で取り扱う (3. 9)
7 他校との教員との交流を促進する (3. 8)
8 同校の経験ある教員から助言が得られる仕組みをつくる (3. 9)
9 関連する書籍・雑誌などを購入、紹介する (3. 6)
10 同校の同僚・若手の教員との交流を促進する (3. 6)

(3) 考察

- ・ 「思考力」、「表現力」に関しては、どの教科も力の高まりを感じている。
- ・ 協働的学習の場における個々の主体性やコミュニケーション能力に関しても高い伸びを感じている。
- ・ 「情報を収集し、選択、活用する」といった「判断力」の部分に課題を感じている。
- ・ 参加型学習の実施には、授業前後の教員負担（準備や評価）が大きく、そのためには他の事務作業の軽減が必要であると多くの教員が考えている。
- ・ 「参加型学習になじめない生徒やついてこれられない生徒がいる」、「生徒の私語が増える」など講義型学習では見られない参加型学習ならではの悩みも抱えている。

- ・ 教員のスキル不足を補うため、授業方法や評価方法など、校内・校外での研修や教員同士の交流、書籍等からの「学びの場」が必要だと考えている。(ファシリテート能力の充実)。
- ・ 「授業進度が遅くなる」ことを不安視する教員は多い。(評価「5・あてはまる」,「4・ややあてはまる」とした教員はそれぞれ全体の58%, 芸術科以外は76%)。この点については「授業進度」や「時間数の不足」を常に意識しながら、いずれ考査や模試の「学業成績」へ影響を与えることのないよう、教科内外での反省・改善を絶え間なく行う必要がある。

(4) 教員アンケートまとめ

本アンケートを実施することで、本校教員の「参加型学習」への取り組みと成果、抱えている課題をより明確にすることができた。これを引き継ぎ、「思考力・判断力・表現力の効果的な育成を目指した授業改善」につなげていけるようにしたい。

5 本年度の研究の成果と課題

(1) 成果

ア 生徒の変化（各教科資料より抜粋）

- ・ 自己表現が習慣化し、学習活動がスムーズにできている。(国語)
- ・ 生徒の主体的な学習活動が習慣化されてきた。(地理歴史公民)
- ・ 学習におけるコミュニケーション能力が高まってきた。(数学)
- ・ 生徒同士が協力して課題解決をしようとする姿勢が見られるようになってきた。(理科)
- ・ 生徒同士がよりコミュニケーションをとれるようになり、気付きも多くなった。(音楽)
- ・ 能動的に学習に取り組み、計画的に制作を行うようになった。(美術)
- ・ 注意深く話を聴く姿勢や、まず自分で理解して考えようとする姿勢が見られるようになってきた。(外国語)

イ 教師の変化

- ・ 三年間の指導目標となる「思考力・判断力・表現力の効果的な育成」について、その力が昨年度からどのように変容しているかを測定、評価することで、「育てたい生徒像」のイメージがいつそう具体化されている。
- ・ 本校生徒に合ったアクティブ・ラーニングの実践を行うため、生徒の実態把握と指導法について教員側が主体的に研究する場が増え、授業を改善しようと努めている。
- ・ 教科書を分析して学習における課題設定の手順を系統立てるとともに、評価規準の見直しを進めながら、生徒の思考の深まりを明確にするような教材やワークシートの内容をより充実させることに取り組んでいる。

(2) 課題

ア 各教科の課題（各教科資料より抜粋）

- ・ 協働学習の内容の広がり・深まりを目指し、個人の学習に主体性を持たせる工夫をする。(国語)
- ・ 生徒の学習意欲を高める課題設定や課題解決学習に有効な資料等の収集を継続する。(地理歴史公民)
- ・ リフレクションの必要性は十分に確認できたが、簡潔、継続的に行うことが必要であり、リフレクションシートの工夫やリフレクションの時間設定に課題がある。(数学)
- ・ 生徒が知識を使い思考・判断する段階で、間違いがないかを確認していく必要がある。(理科)
- ・ 点数で計れない評価の方法について検討していかなければならない。(音楽)
- ・ 生徒の授業に対する取り組みに温度差があるため、積極的に取り組めるような工夫が必要である。(美術)
- ・ 研究当初予定していた「読んだことをもとに関連したことを調べる」活動に取り組みたい。(外国語)

イ 協働学習における個人の責任の明確化

現在ほとんどの教科においてペア・グループ学習が取り入れられ、学級によっては日に数度の協働的な学習の場面が設定されている。結果、教える側と教えられる側が固定し、常に教えられる側の生徒が受動的学習者になる恐れもある。話し合えば自分の理解を深められるだろうという安心感が、かえって生徒一人一人の思考を停滞させてしまう場合もあるようだ。昨年度課題に挙げた「自己開示ができるような雰囲気」が醸成されつつある一方で、各個人が役割と責任をもって課題に取り組む姿勢が失われていないか、常に心を傾ける必要がある。協働学習はまず個人の考えをしっかりと持たせた上でなければ、他者に頼ったり任せたりという状態に陥りやすい。したがって、生徒全員がさまざまな役割を担って学習に取り組むように、課題提示の方法に留意していきたい。

ウ 教師の評価規準の明確化と評価方法の工夫

生徒は、自分自身の思考力・判断力・表現力の伸びを確かめたり、次に向けて目標を立てたりすることで学習を効果的に行える。それには、授業においてどのような学習活動を通して、どのような力を付けたいのかが明確に示されることが欠かせない。そこで、教師には評価規準を明確に立てることが求められる。また、単元ごと、時間ごとに評価規準と評価方法を検討することは、生徒のリフレクションを充実させることにもつながるだろう。そして、それらの評価規準をふまえた考查問題を作成することも検討が必要である。これは、考查以外の評価との関わりを考慮しながら進めたい。今後とも教科間の連携・情報交換、他校の実践例の研究や研修の機会を増やしていこうと考える。

エ 「高等学校基礎学力テスト（仮称）」「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」に対応できる力の育成

今回の研究主題の設定には、社会が多様性を増す中、新学習指導要領で示された「生きる力」と「確かな学力」を生徒に付けさせたいという願いが根幹にある。本校生徒の約6割が国公立大学進学を希望している現状において、これからの入試に対応できる「思考力・判断力・表現力の育成」は必須である。アクティブ・ラーニング型授業には本項の「**(1)成果**」がもちろん見られるが、一方で「講義内容・演習時間の減少」に不安を覚える教員・生徒も少なくない。主体的な「思考」・「判断」・「表現」を目指す上で、「習得」を念頭におきつつ、生徒の能力・実態に応じて段階的に、知識を活用させる機会を増やしていかなければならないと考える。

今後も研究を重ね、知識・技能の定着度を測るだけでなく、現在一部教科で取り組まれているように、生徒の記述答案の分析や、応用問題の作成等、授業改善と生徒への還元に努める必要がある。

国語科（国語総合）学習指導案

日 時：平成 28 年 11 月 2 日 6 時間目

場 所：松陽高校音楽科 1 年 7 組教室

（男子 4 人女子 26 人計 30 人）

科 目：国語総合（5 単位）

授業者：岡留 幸恵

1 単元名 昔話を経済学の視点で読み解く～わらしべ長者はラッキーなのか～

2 教材名 「『わらしべ長者』の経済学」（数研出版「高等学校国語総合」）

3 生徒の実態と単元設定の理由

高校生活も 7 ヶ月を過ぎ、多くの生徒が高校生としての生活習慣や学習習慣を確立している一方で、学力差が顕著に現れはじめ、学習意欲が下がりつつある生徒も少数いる状況である。授業に対する取り組みは良好で、積極的に学習活動に取り組む姿勢が見られる。

評論に対して苦手意識を持っている生徒は多いが、普通科・美術科に比べ、特に音楽科ではその傾向が強い。一方で、音楽科の生徒は感性が豊かであり小説教材には意欲的に取り組む生徒が多いように感じる。

本教材は身近な昔話を経済学の視点で解釈したものであり、また、経済学は人間の幸福に寄与するものであるという筆者の基本的姿勢を理解することで、評論や経済学といった生徒が敬遠しがちな分野に少しでも興味・関心を持たせたいと考える。様々なものの見方、考え方に触れ、生徒の内的世界を広げることが目的とし、本単元を設定した。

4 育成を目指す言語能力

昔話を経済学の視点で解釈した文章を読み、筆者の意図を捉え、ものの見方・考え方を豊かにする。
（国語総合 C読むこと 指導事項エ・オ）

5 単元の目標

ア 教材の読み取りを通してものの見方、考え方を豊かにしようとしている。

（関心・意欲・態度）

イ 教材の読み取りを通してものの見方、考え方を豊かにしている。

（読む能力）

ウ 一般論との対比を効果的に用いた文章展開を理解している。

（知識・理解）

6 単元の評価規準

関心・意欲・態度	読む能力	知識・理解
教材の読み取りを通してものの見方・考え方を豊かにしようとしている。	①昔話を経済学の視点で解釈した筆者の意図を理解している。 ②童話「人魚姫」を経済学の視点で読み取ることを通して、ものの見方・考え方を豊かにしている。	一般論との対比を効果的に用いた文章展開を理解している。

7 取り上げる言語活動

昔話や童話作品の主人公の行動を、経済学的な視点から説明させる。

(国語総合 C読むこと 言語活動例エ)

8 単元の指導計画（全6時間）

時 間	単 元	学習活動	単元の評価規準	評価方法
1	導 入	1 学習課題を設定する。 2 本文を通読し、展開と大意を捉える。		
2	展 開 1	1 第1段落を読み、内容を理解する。 2 「わらしべ長者」の「男」がした経済学的価値の創造についてまとめる。	知識・理解 読む能力①	行動の観察 記述の確認
3 ・4	展 開 2	1 第2段落を読み、内容を理解する。 2 「わらしべ長者」の「男」は重要な経済活動の結果、富を得たという筆者の論理を理解する。	知識・理解 読む能力①	行動の観察 記述の確認
5	展 開 3	1 第3段落を読み、内容を理解する。 2 ブータンの話の「男」が得た利益について考える	知識・理解 読む能力①	行動の観察 記述の確認
6	ま と め	1 「経済学の視点」を再度確認する。 2 童話「人魚姫」を経済学の視点で解釈する。	読む能力② 関心・意欲・態度	記述の分析 行動の観察

9 本時の実際（6／6）

（1）本時の目標

童話「人魚姫」を経済学の視点で解釈してみよう。

（2）本時の評価規準

- 教材の読み取りを通してものの見方，考え方を豊かにしようとしている。

（関心・意欲・態度）

- 経済学の視点で童話「人魚姫」を読み取り，自分の意見をまとめることを通して，ものの見方・考え方を豊かにしている。（読む能力②）

（3）本時の展開

過程	時間	主な学習活動	指導上の留意点	評価方法
導入	5	・前時までの学習を振り返り，本時の目標と流れを確認する。	・本時の目標を板書する。 ・「人魚姫」のあらすじを確認する。 ・本時の学習活動の流れを説明し，見通しを持たせる。	
展開 1	10	・「経済学の視点」について確認する。 個人→ペア→個人	・「自発的交換による経済学的価値の創造」について振り返らせる。 ・「わらしべ長者」の男が行った経済活動について振り返らせる。	行動の観察
展開 2	30	・童話「人魚姫」を経済学の視点で解釈してみる。 個人 ↓ グループ活動 ↓ 個人	・「人魚姫」が「交換」と「リスク」の観点で経済学と結びつくことを理解させる。 ・「人魚姫」は悲話であるという一般的な見方に対する自分の考えをまとめさせる。	行動の観察 記述の分析
終 末	5	・単元を振り返り，筆者の主張を再度確認する。	・視点を変えてみることで，自分自身のものの見方・考え方が深まったか振り返らせる。	記述の分析

「人魚姫」を経済学の視点で解釈するという問いに対する生徒の解答例を以下に示す。

なお、交換によって得られる利益について、単に「王子様のそばにいられる」ではなく、より深く考察しているものをA解答とした。

- ③「人魚姫は悲話である」という一般論に対し、経済学の視点で解釈した場合、あなたは
どう考えますか。（理由を挙げて説明すること）

【B解答】

・魔女と声をひきかえに人間になる薬をもらった所だけ見ると、姫も願っていたことが叶って好ましい交換だと言えるが、王子と結婚しなければ泡になってしまうというリスクを承知の上投資したにも関わらず結婚できずに死んでしまった所を見ると、一方が幸せになっていない結末といえるので、経済学の視点で解釈した場合にも悲話であると考ええる。

・「人魚姫は悲話」ではないと私は考える。なぜなら人魚姫は人間になり王子のそばにすることができ、双方にとって利益のある話だからだ。また人魚姫は王子と結婚できなければ泡になってきえるという条件に対して同意しているからだ。そして最後のところで人魚姫は、結婚はできなかったがあわにならず神様の国である天国へとのおぼっていく。これらのことから「人魚姫は悲話でない」と考える。

【A解答】

・私は、経済学の視点で解釈した場合、「人魚姫は悲話である」という一般論は正しくないと思った。もし、人魚姫が魔女との契約をかわさず、一生王子様に会えないままだとしたら、一生の悔いが残ったと思う。人魚姫にとってはリスクの大きい投資だが、それ相応の利益は得られたと彼女も感じているだろう。よって、「人魚姫はかわいそうだ」と思っている人も多いだろうが、彼女だけは、幸せだったと確信していると思う。

・「人魚姫は悲話である」という一般論がある。だが経済学の視点で解釈するならば、私はそうは思わない。自発的交換により、魔女はキレイな声を人魚姫は人間になる薬を手に入れた。人魚姫は自分の声を犠牲にして結婚はできなかったが、一時の幸せそして人を愛することを利益として得られた。このようなリスクの大きい投資をしなければ「幸せ」「愛」という利益は得られなかった所以我は悲話ではないと考える。

地歴公民科学学習指導案

科 目	授業学級	授業場所	使用教科書	授業者
世界史B	2年8組（美術科）33名 （男子5名，女子28名）	2年8組	『詳説 世界史』 山川出版社 世B304	加治 大樹

1 単元（題材）名

- （１）第４章 イスラーム世界の形成と発展 ３インド・東南アジア・アフリカのイスラーム化
（２）単元を深く理解するための問い
「イスラーム教はなぜ世界各地で受け入れられるようになったのか」

2 単元（題材）の目標

7世紀から16世紀初めにいたるイスラーム世界の展開をたどり，イスラーム教の成立と発展の歴史，その教義や文化的特徴について理解する。

3 単元（題材）の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技術	知識・理解
・ イスラーム教の成立と特徴に関心を持ち，その社会や文化の特色に関する関心を，意欲的な課題追究の姿勢につなげている。	・ 民族構成やスンナ派とシーア派の相違点などを念頭に，イスラーム諸国家の興亡の過程を考察，説明することができる。	・ イスラーム諸国家の成立と発展について，資料から有用な情報を読み取ったり，地図や年表を用いながら体系的にまとめたりしている。	・ イスラーム教の基本的な知識を前提に，その教義上の特徴が，地域的，文化的広がりによどのような影響をもたらしたかを理解している。

4 単元（題材）の指導計画（全7時間）

第４章 イスラーム世界の形成と発展

	関心・意欲・ 態度	思考・判断・ 表現	資料活用 の技術	知識・理解
1 イスラーム世界の形成（2時間）	○			○
2 イスラーム世界の発展（1時間）	○		○	○
3 インド・東南アジア・アフリカのイスラーム化（3時間）←本時	○	○		
4 イスラーム文明の発展（1時間）	○			○

5 教材（単元・題材）観（単元概要）

本単元では，イスラーム拡大の原理や政治・社会を理解するために①イスラーム教の教義上の特徴を理解すること，②民族や宗派の違いを軸に諸王朝の興亡をとらえること，③イスラーム世界の拡大については征服活動だけではなく商業活動も重要な要素であると読み取ること，④イスラームの影響下に発展した高度な科学知識や技術について認識することなどについて，資料を基とした生徒の「思考・判断・表現」活動を促す。その上で，単元を深く理解するための問いへの答えとして，「アラブ人の民族宗教として生まれたイスラーム教は，その普遍性と平等性から，世界各地の民族に受容される世界宗教となった」点に気付かせる。

6 生徒観（生徒の実際）

生徒は美術科であり、日頃から創造的な活動をしている。そのためか、普段の授業でグループ作業を行う際も、学習課題に対して積極的に取り組む姿勢が見られ、歴史科目を単なる「暗記科目」として捉える生徒は少なくなっている。

7 指導観

生徒各自が学習課題に取り組むこと（本時では読み解いた内容をわかりやすい文章にまとめること）によって、相互に協力しながらイスラーム教の広がりやその特徴について、興味・関心をもち、世界史を学ぶ意義を感じさせたい。

8 本時の実際

（１）本時の目標

拡張現実（AR）型位置情報ゲームに関するマレーシアのイスラーム法評議会の声明について報じた新聞記事（平成 28.8.7 日経新聞）を題材に、イスラーム信仰の広がりやイスラーム法の規範が世俗社会にも及ぶことを、既習事項を手掛かりに考察し、その新聞記事に関する解説（読者は、イスラームに対する予備知識の乏しい小学校高学年児童～中学校生徒を想定）を作成する。

（２）本時の評価基準

本時の評価基準としては、「他者の意見に耳を傾け、尊重しようとする姿勢がみられる」・「グループの中で任された役割について、積極的にその役を果たそうとしている」（以上【意欲・関心・態度】）、「平易な表現を用いてイスラームの特徴や、記事の解説に必要な情報を簡潔な表現でまとめられている」（以上【思考・判断・表現】）の２観点を中心に評価を行いたい。

（３）本時の展開（全 7 時間の 4 時間目）

場面	学習課題の設定による学習への「関心・意欲・態度」の喚起	想定される主体的・協働的な学習
小テスト	イスラーム教に関する宗教的基礎知識の確認（問題は口頭で出題，解答も口頭で提示）。	答案の相互採点
課題設定	なぜ，マレーシアはイスラーム教国となり，「ポケモン GO」を禁止しているのか？	【生徒個人の活動】 ・配布された新聞記事から読み取った情報を各自で整理する。 ・解説に使用できそうな既習事項を抜き出しておく。

課題追究	「基礎的・基本的な知識・情報」の習得	【主体的・協働的な学習 1】
	○イスラームは商人出身のムハンマドが創始した一神教であり、偶像崇拜は禁止されていること。 ○イスラームの信者は神の前に平等とされること。 ○イスラームの規範は、宗教面だけでなく、人間生活のあらゆる場面に及ぶこと。 ○ムハンマドは教えを説く際に商業用語を用い、イスラームにおいては商取引の不正は厳しく諷められていること。 ○15 世紀にマレー半島南部を支配していたマラッカ王国が周辺国の干渉に対抗するためにイスラームに改宗し、ムスリムの商業ネットワークとの関係を強めたことが、現在のマレーシアの宗教構成に影響していること。	・グループを構成し、役割を確認する（※この欄の下部参照）。 ・各生徒が抜き出した既習事項を持ちより、グループ内で意見を交換する。 ・論を補足するための基礎知識・情報を、資料を基に収集する。
	「資料活用の技能」の習得	【主体的・協働的な学習 2】
	○配布資料等を活用して、共通して書かれている事柄に注目し、それを抜き出すことができる。	・各グループに、①マレーシアにイスラームが受容された理由、②イスラーム評議会がゲームで遊ぶことを禁止し得る理由のどちらかをテーマとして与え、簡潔な解説文を書かせる。
	習得した「知識・技能」を活用した「思考・判断」 商人出身のムハンマドが創始したイスラーム教は、一神教という教義上の特徴もあり、平等や公正なルールを重視したことから商業ネットワークを通じて世界各地に信仰を拡大した。また、絶対の存在であるアッラーの定めた規範は、信仰面だけでなく、世俗の政治・社会をも包括するものである。	【主体的・協働的な学習 3】 ・学習 2 におけるテーマ①のグループとテーマ②のグループを合わせて大グループをつくり、大グループ毎に、それぞれの解説文を統合して、解説文を完成させる。 ・まとめられた記事（4 本）を前方黒板に掲示、解説の明確さと簡潔さを基準に評価を行う。
課題解決	予想される生徒の表現例	※4 名（人数次第で記者を増員）で構成。役割は下のとおり（資料を用いた情報収集は全員が行う）。
	マレーシアがイスラーム教国となったきっかけは、タイのアユタヤ朝の進出に対抗し、西方イスラーム勢力を味方につけようと考えたマラッカの王が、15 世紀にイスラームに改宗したことである。イスラーム教は厳格な一神教であり、日常の生活や政治・社会に至るまでイスラームの法（シャリーア）の規範が及んでいる。教義上、他の宗教の信仰・偶像崇拜・賭博行為などを禁じているため「ポケモン GO」は教義に反するという理由から禁止された。	◦編集長…グループをまとめ、グループ外への発表等を行う ◦副編集長…編集長を補佐し、グループ外からの質問に答える。 ◦デスク…解説記事をまとめ、記録を行う。 ◦記者…教師や他のグループから情報を収集する。

理科学習指導案

科 目	授業学級	授業場所	使用教科書	授業者
物理基礎	1年6組（普通科）41名 （男子20名，女子21名）	物地講義室	新編 物理基礎 （数研出版）	松山 為直

1 単元（題材）名

第2編 熱 第1章 熱とエネルギー 第2節 熱と物質の状態

2 単元（題材）の目標

物質には，固体，液体，気体の3つの状態が存在し，いずれの状態でも熱運動があること，多くの場合，温度が上がると物体の体積が大きくなることを理解させる。また，気体の内部エネルギーが熱運動による気体分子の運動エネルギーによること，さらに熱力学第一法則によって，物体の内部エネルギーを増加させる方法が2通りあることを理解させる。

3 単元（題材）の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	観察・実験の技能	知識・理解
同じ物質でも温度を変えると，固体・液体・気体になる。なぜこのようなことが起きるかに興味・関心を示している。 熱が何を表しているかについて興味・関心を持っている。	状態変化のようすと，その際の熱のやりとりについて考えることができる。 熱力学第一法則とは具体的に何を意味するかを思考し表現することができる。	固体を熱すると膨張し，長くなることを実験で確認することができる。 物体に仕事をさせることによって温度が上昇することを，実験で確認することができる。	固体について，0°Cのときの長さとその固体の線膨張率が与えられたとき，$t^{\circ}\text{C}$のときの長さを計算して求めることができる。 仕事と熱の関係について理解している。

4 単元（題材）の指導計画（全6時間）

- 1 熱と熱量（2時間）
- 2 熱と物質の状態（1時間）
- 3 熱と仕事（1時間）
- 4 不可逆変化と熱機関（1時間）
- 5 演習（1時間）※本時

5 教材（単元・題材）観

一般に，物質には3つの状態がある。この3つの状態について，物質を構成する粒子（原子・分子・イオン）の熱運動を通して理解させることが目標である。今回は，検証実験として液体窒素を用いる。液体窒素は，生徒が興味を持ちやすく，いろいろな物理現象について理解を深めさせることのできる教材である。例えば，熱運動，状態変化，気体の体積変化などは，液体窒素を使用すると室温との温度差が大きいので変化がわかりやすくなる。また，気体の内部エネルギーが熱運動による気体分子の運動エネルギーによることを理解することにより，熱力学第一法則についても理解が深まる。公式の暗記に頼ってしまいがちな現象を粒子の振動に注目させることにより，正確な理解につなげたい。

6 生徒観

1 学年の普通科クラスであり、全体的に明るいクラスである。学習に対するモチベーションについては個人間にやや開きはあるものの、全体的に授業に前向きに取り組むような雰囲気がある。授業中は、積極的に発表・質問する生徒も見られる。一方では、理解力に差があり学習内容の定着には工夫した授業展開が必要である。言語活動を取り入れた学習には高い満足度を示す一方、疑問に思うことを互いに相談して解答を導く経験が不足している。

7 指導観

演示実験を通して生徒の興味・関心を引き出し、言語活動を取り入れることで学習内容の定着を図りたい。また、小林昭文先生（産業能率大学教授）の授業を参考にした、「アクティブ・ラーニング型授業」を取り入れることで、生徒の思考力・判断力・表現力を高めたい。アクティブ・ラーニング型の授業は、生徒の授業に対する満足度が高い。しかし、復習中心の授業では容易に導入できるが、新しい単元では授業時間が足りず導入が難しい。よって、ICT の活用が必要となる。また、演習時の問題数が多すぎたり難しすぎたりすると生徒の満足度は低くなるため、演習問題選びに注意が必要である。現在は、復習時のみ導入しているが、アクティブ・ラーニング型の授業を実施する時期や場面を吟味し、単元を見通した計画を作成する必要がある。

8 本時の実際

(1) 本時の目標

- ア 粒子の振動に注目して、熱による現象を説明することができる。
- イ 熱力学第一法則を理解する。

(2) 本時の評価規準

- ア 粒子の熱運動と粒子間に働く力との関係により、物質の状態変化が起こることについて考察し、導き出した考えを表現している。【思考・判断・表現】 【関心・意欲・態度】
- イ 言語活動を積極的に行うことで、熱力学第一法則について理解し、内部エネルギーの増減について定量的に扱うことができる。【思考・判断・表現】 【知識・理解】

(3) 本時の展開

	学習活動	指導上の留意点	評価
導入 5 分	・態度目標・内容目標・授業の流れを確認する。	・態度目標を説明する。(科学者になる) しゃべる・質問する・説明する・動く・協力する・貢献する ・内容目標を説明する。 ・粒子の振動に注目して、熱による現象を考察し、説明することができる。 ・熱力学第一法則を理解する。 ・授業の流れを説明する。	

		・内容説明（検証実験）・・・20分 ・演習・・・15分 ・確認テスト・・・10分	
展開 ① 20分	・物質の状態変化について確認をする。 ・演示実験を観察する。 実験① 風船の冷却実験 [予想]ワークシートに記述 [観察]教卓に注目 [結果]ワークシートに記述 実験② 液体窒素の蒸発実験 [予想]ワークシートに記述 [観察]教卓に注目 [結果]ワークシートに記述 グループ活動 <u>・グループで協議し、考察を行い代表者が発表する。</u> ・熱力学第一法則について確認をする。 実験③ 断熱変化の実験 ・演示実験を観察する。 ・熱力学第一法則について、アニメーションにより理解する。	・既習事項の確認をさせる。 演示実験 《実験内容》ゴム風船内の空気を液体窒素で冷却し、その後常温に戻す。 ・風船内の空気の体積変化に着目させる。 《実験内容》液体窒素に浸したティッシュペーパーをフィルムケースに入れ、フタをして密閉する。 ・液体と気体の体積の差を想起させる。 ・粒子の振動に注目し、考察させる。 ・発表方法について指示をする。 ・既習事項の確認をさせる。 《実験内容》シリンダーの底に綿くずを少量入れ、ピストンを急激に押し込む。 ・ガラス管内の温度変化に着目させる。 ・粒子の運動に注目させ、熱力学第一法則を理解させる。	・粒子の熱運動と粒子間に働く力との関係により、物質の状態変化が起こることについて考察し、導き出した考えを表現している。 【思考・判断・表現】 【関心・意欲・態度】

展 開 ② 15 分	グループ活動 ・ <u>演習問題に取り組む。</u>	・ 机間巡視をしながら声をかける。 チームで協力できていますか？ ・ テスト10分前に声をかける。 確認テストまであと10分ですが順調ですか？ ・ テスト5分前に声をかける。 確認テストまであと5分ですが順調ですか？	・ 言語活動を積極的に行うことで、熱力学第一法則について理解し、内部エネルギーの増減について定量的に扱うことができる。 【思考・判断・表現】 【知識・理解】
ま と め 10 分	・ 確認テストを解く。 ・ 採点をする。 ・ 振り返りシートに記入する。	・ 確認テストを解かせる。 ・ 相互採点をさせる。 ・ 用紙を回収し、生徒の活動状況・理解度を確認する。	

9 参考文献

アクティブ・ラーニング入門 小林昭文著 産業能率大学出版部

音楽科学習指導案

科目	授業学級	授業場所	使用教科書等	授業者
音楽史	2年7組(音楽科) 20名 (男子3名, 女子17名)	音楽室2	音楽史 (教育芸術社)	宮原 真紀

1 題材名 「ヨーロッパの文化や音楽について知ろう (ウィーン・ザルツブルグを中心に)」

2 題材の目標

- (1) 音楽史について理解を深め、興味・関心をもたせる。(情意目標)
- (2) ヨーロッパの文化や音楽を理解させ、発表を通して表現させる。(認知目標)
- (3) 音楽史について理解を深め、表現及び鑑賞する力を養わせる。(感覚・技能目標)

3 題材の評価規準

- (1) 音楽史について、興味・関心をもって研究している。(関心・意欲・態度)
- (2) ヨーロッパの文化や音楽について表現しようとしている。(音楽的な感受や表現の工夫)
- (3) 研究した内容について、表現をするための技能を身に付けている。(表現の技能)
- (4) 自分の発表や相互の発表に関して意欲的に学習することができる。(鑑賞の能力)

4 題材の指導計画(全8時間)

- (1) 第1次 グループに分かれ、研修旅行での学習で特に興味・関心をもった内容を選ぶ。(1時間)
- (2) 第2次 研究内容について資料を基に調べる。(3時間)
- (3) 第3次 演奏を含む発表内容について検討する。(1時間)
- (4) 第4次 相互発表をする。(2時間)(本時)
- (5) 第5次 発表のまとめをする。(1時間)

音楽科では、2年次に研修旅行でウィーン・ザルツブルグを訪れる。また、事前研究として、ヨーロッパの文化や音楽、生活習慣などについてもグループに分かれ研究に取り組む。そのため、これまでに学習した音楽史の基礎的知識を基に、研究した内容を発表し、相互理解を深め、より深い現地での研修になるよう学習する。

音楽を理解する上で歴史や文化、音楽の成り立ちを学ぶことが、音楽表現にいかにより必要であるかを認識できるよう学習を進める。

5 教材観

「音楽史」は、音楽を学習する上で大変重要なものである。音楽科では2年次より2年間「音楽史」を学び、音楽的な基礎知識を習得し、演奏表現の土台を形成していく。研修旅行先であるウィーン、ザルツブルグに関する事前研究は、生徒の学習において既習の学習内容をより深いものとし、研修旅行での学習について、興味・関心をもち充実した演奏表現への意欲が高まるものである。

6 生徒観

音楽科の生徒であるため、これまで多くの音楽の基本的な内容について学習に取り組んでいる。21人の専攻ごとの内訳は、管弦打楽器専攻生13人、ピアノ専攻生4人、声楽専攻生3人となっている。

音楽史については2年次より学習しているが、実際の演奏表現につながるような深い理解まで到達していない生徒もみられ、研修旅行を通してより実践的な学習をしたいと望んでいる。

学級の雰囲気は、明朗で意欲的であり、明るい雰囲気の中で授業を展開することができるが、自分の考えや意見をしっかりと述べることに課題があるため、自発性をより培っていきたい。

7 指導観

音楽史の授業においては、音楽が誕生しこれまで代々受け継がれてきたことについて、歴史や時代背景、文化についての基本的知識の習得が不可欠となる。生徒同士が協力して研究した内容について互いにしっかり理解し、アクティブ・ラーニングを用い音楽表現につながる知識を身に付け、のびのびと表現できるように指導を進めていきたい。既習の知識を踏まえ、より幅広い興味をもち研修旅行に臨めるような学習を目指せるよう指導したい。

8 本時の展開

(1) 本時の目標

ア 意欲的に取り組み、のびのびとした表現ができる。(関心・意欲・態度)

イ 音楽史について理解し、相互発表に関心をもって取り組むことができる。

(表現の工夫、表現の技能、鑑賞能力)

(2) 本時の実際

過程	展開	学習内容	指導上の留意点 ()は評価の観点
導入	5分	研修旅行の事前研究についての意義について触れ、前時の復習をする。 本時の学習目標を確認する。	音楽史について理解させる。 (関心・意欲・態度)
展開	10分	研修旅行の訪問地であるウィーンやザルツブルグについて基本的事項について理解する。 演習を行い、理解を深める。 【アクティブ・ラーニング】	基礎的知識を正しく把握させる。(思考力・判断力) 机間指導を行い生徒の理解度を確認し、個別に指導を行う。 (表現の工夫・技能、鑑賞の能力)

	30分	研究したことについて演奏発表する。 ・ウィーン，ザルツブルグの歴史や文化について ・ベートーヴェンについて ・モーツァルトについて など 【アクティブ・ラーニング】 発表した内容について相互に感想を述べる。 まとめを行い，理解を深める。	発表内容について把握させる。 机間指導を行い，個別に指導する。 (表現の工夫・技能，鑑賞の能力)
まとめ	5分	本時のまとめと次時の予告	本時についてまとめる。 次時の予告をする。

(3) 本時の評価

ア 意欲的に取り組み，のびのびとした表現ができたか。(関心・意欲・態度)

イ 音楽史について理解し，相互発表に関心をもって取り組むことができたか。
(表現の工夫，表現の技能，鑑賞能力)

美術科学習指導案

科 目	授業学級	授業場所	使用教科書等	授業者
絵 画	1 年 8 組（美術科）39名 （男子 6 名，女子 3 3 名）	美術教室	美術の表現と技法	前村卓巨

1 題 材 名 自画像を入れた構想画の制作（油彩画）

2 題材の目標

- (1) 主題を生成し，主題に沿った発想ができる。主題を追求するための資料を揃え，作品の構想を練ることができる。
- (2) 資料を効果的に活用し，作品制作に生かすことができる。
- (3) 主題に沿った自画像を描くことができる。
- (4) 自分の作品の構想について説明することができ，また友人の構想に対し，意見を述べることができる〔アクティブ・ラーニング〕。
- (5) 友人の意見を参考に試作を繰り返し，最終的に構想をまとめる過程をとおり，『発想や構想の能力』や『鑑賞の能力』を高め，新たな表現意図や価値感を得たことを実感的に理解させる。
- (6) 油彩画の基本的技法を踏まえながら，主題にあった表現方法を工夫することができる。
- (7) 制作途中でも指摘し合い，よりよき作品の完成を目指して制作することができる〔アクティブ・ラーニング〕。

3 題材の評価規準

関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
油彩画について関心をもつとともに，よりよい表現ができるよう工夫する。 友人の発表に関心をもって真剣に聞き，自分の意見を言うことができる。	主題に対し，表現に必要な資料を集め，参考にすることができる。 友人の発表を理解し，構想に生かすことができる。	構想を絵に表すことができる。 主題にあった表現方法を工夫することができる。	構想案について，考えを述べることができる。また，他人の作品に対し，意見を述べることができる。

4 題材の指導計画（全 18 時間）

- (1) 第 1 次・・・同じ高校生が描いた全国大会の作品を鑑賞し、構想に対しどう表現しているかを読み取らせ、構想に役立てる（1 h）。
- (2) 第 2 次・・・構想のための「自画像」や「風景」をデッサンすることとともに、集めた画像や資料を写すことにより、デッサンの能力を伸ばす（4 h）。
- (3) 第 3 次・・・資料を基に構想を練り一枚の構想画を作らせる（1 h）。
- (4) 第 4 次・・・構想画について話し合い修正を加え決定する（2 h）。・・・本時(1/2)
- (5) 第 5 次・・・油彩画制作(8 h)
- (6) 第 6 次・・・鑑賞(2 h)

5 生徒観

本校は県内唯一の美術科を有する高校である。そのため、中学時代に既に美術を指向しており、美術に対する意識が高い。油彩画についても入学当初から制作意欲を強くもっている生徒が多く、これまで、県美展、女流美展など多くの展覧会に出品し、実績を積んできた。現在は、南日本美術展に向けて 21 名の生徒が 100 号に取り組んでいる。

6 題材観

絵画においては、油彩画の道具の基本的な使用法を学ばせるとともに、自分の構想を具体的に作品化していくことが大切である。本題材は、「自画像」と「構想画」の要素を併せもつ油彩画の制作を中心とする。主題を生成し、造形的な効果を生かし創造的に表現するとともに、ほかの生徒の構想や完成作品から作者の心情や意図と創造的な表現の工夫などを感じ取り味わわせたい。自分の描きたい構想を、1 枚の作品に仕上げていく過程の中では①構想を言語で表現すること、②友人の意見を参考にしながら試作を重ね、構想に取り入れていくことなどを通し、主体的・協働的に試行錯誤する課題解決法などについても学ばせる機会としたい。

7 指導観

本題材では、前述の構想を練り上げる場面等でアクティブ・ラーニングを積極的に取り入れ、①自分の構想を言語で表させ、②友人の意見を参考に、よりよい表現を目指すよう取り組ませたい。また、創造的な技能を働かせていく場面では、クロッキーやデッサンと、デジカメで捉えた画像や資料を基に、昨今みられるただ写真を忠実に写し取ろうとする表現行為から、資料としての写真や画像をどう取り入れ参考にしていくか考えさせ、作品表現のための活用法を学ばせたい。

これらの学習を、必要に応じて表現と鑑賞を相互に関連させ、より主体的・言語的に深く学ばせることで、生徒自身の中に新しい意味や価値をつくりだすことを目指し指導したい。

8 本時の実際

(1) 本時の目標及び評価の観点

- ア 作品を作り上げるための構想の過程を具体的に説明することができる。
- イ 友人の作品について制作意図を理解し、自分の発想を加味した形で指摘することができる。
- ウ 友人の意見を参考に、試案を検討し次の試案を作成することができる。
- エ 最終的に構想をまとめる過程をとおり、「発想や構想の能力」や「鑑賞の能力」を高め、新た

な表現意図や価値感を得たことを実感的に理解できる。

オ 積極的に話し合いに参加することができる

(2) 指導上の留意事項

ア 事前指導

- ・ あらかじめ、学習プリントを配布し、今回の題材の意図及び全体計画を理解させておく。
- ・ 構想画の試案を作らせる。

イ 導入段階

- ・ 本時の活動内容を理解させ、効率よく活動できるようにする。

ウ 展開段階

- ・ 班活動と、自由な討議活動の2段階で構想案をまとめる。
- ・ 班長を中心に、限られた時間で話し合いをさせる。
- ・ 構想について、発想の過程を追って説明させ、資料についても合わせて触れさせる。
- ・ 友人の発表を聞きながら自分の意見を発表できる。
- ・ 途中、友人の意見を参考にしながら、構想案作成に向けて制作する。

(3) 準備

- 教師：プロジェクタ、オーバーヘッドカメラ
- 生徒：自画像、構想のための資料、デジカメ、筆記用具

(4) 本時の展開

学習過程	生徒の学習活動	指導上の留意点(※)と評価方法(◇)
導入 (5分)	既習内容の確認をするとともに、本時の学習のねらいを理解する。 【学習のねらい】 「構想画の試案について、友人の意見を取り入れ、構想案を仕上げよう」	○ 事前に学習プリント等を配布しておく。 ○ 前時の振り返り ○ 主題を確認させ、本時の学習のねらいについて説明する。 ※ この授業を通して、身につけてほしい能力について示す。 ◇ 意見を聞く姿勢〔関心、理解〕
展開1 (20分)	1 班で発表し合う（試案の修正）。 〔アクティブ・ラーニング型活動Ⅰ〕 (1) 発想の過程を追って構想に至った経緯を説明し、資料についても合わせて触れる。資料を示しながら	6人グループ(3)と7人グループ(3)の6グループで、1人3分ほどで話し合わせる。 ○ 班長を中心に、1人1人説明をし、それに対して意見を述べ合う。 ○ 友人の意見を参考に、よりよい構想にするために、共有化する。 ◇ 効果的発表の態度〔表現〕 ◇ 他者の意見を聞く姿勢〔関心、理解〕 ◇ 自分の考えを述べる〔表現、思考〕

	ら構想画の案について説明をし、 それに対して意見を述べ合う。 (2) 友人の発表に対し、自分ならどうするか意見を出し合う。 (3) 方向性が決まった生徒は、話し合いを踏まえ試案を修正する。	○ 話し合った内容を参考に試案 2 を完成する。 ◇ 構想を書き上げる能力〔表現〕
展開 2 (15 分)	2 自由に相手を選び話し合う（構想案の作成）。 〔アクティブ・ラーニング型活動Ⅱ〕 (1) 班活動を踏まえ、修正案を基に自由に相手を選び意見交換する。 ア 自分の試案について班活動で何を学びどう変わったかを説明する。 イ 友人から意見をもらおうと共に、友人の作品についても意見を述べる。 (2) 最終的に構想案を完成させる。	○ 班を解き、課題を解決するために必要な相手を自由に選ばせ、より深まった意見交換ができるようにする。 ○ 場所も特定せず自由な雰囲気です話しか合わせる（教室外でもいいことを告げる）。 ◇ 積極的に相手を探し意見を述べる姿勢〔関心、表現〕 ◇ 構想を書き上げる能力〔表現〕

ま と め (10 分)	3 鑑賞活動 (1) 活動の結果を発表する。 試案～構想案に至った経過を説明する。 ア 自分の発想について。 イ 友人の指摘でどう変わったか。 (2) 教師の説明を聞き、本時の学習の成果を理解する。 4 次時の予告を聞く。	○ 代表を選び、発表させる（進行も行わせる）。 ○ オーバーヘッドカメラを用いて説明する。 ◇ 意欲的に意見を聞く姿勢〔関心, 思考〕 ◇ 他者の意見を聞く姿勢〔関心, 理解〕 ○ 「1 枚の作品を作り上げるためには、発想力と共に、さまざまな手段を用いた構想の練り上げが大切であること」を発問等により生徒自身に気付かせる。 また、「資料の大切さ」にも触れ、まとめとして、「多くの大切さを学び、結果として特に『発想や構想の能力』と『鑑賞の能力』が高まり新たな表現意図や価値感を得たこと」を実感的に理解させる。 ○ 「本時の活動を基に、最終的に 1 枚の構想画に仕上げる」ことを伝える。
-------------------------	--	--

英語科学習指導案

科 目	授業学級	授業場所	使用教科書	授業者
コミュニケーション英語Ⅰ	1年4組（普通科）40名 （男子20名，女子20名）	1年4組	Grove English CommunicationⅠ	中島 真理子

1 単元（題材）名

Lesson 5 Brightening the future

2 単元（題材）の目標

- （1）山形県立東根高等学校の生徒のプロジェクトに関心を持ち，意欲的に自分の将来の夢について書いたり，話したりしようとする。
- （2）絵や写真を見ながら，内容を英語で説明し，自分の考えや意見を話したりする。
- （3）読んだ文章を正しく理解する。
- （4）新しい語彙，分詞の形容詞的用法，to不定詞の形容詞的用法，受動態について理解し，さまざまな言語活動の中で使う。

3 単元（題材）の評価規準

ア コミュニケーションへの関心・意欲・態度	イ 外国語表現へ能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての知識・理解
①ペアやグループでの活動に積極的に取り組もうとしている。 <u>②意欲的に自分の意見を書いたり話そうとしている。</u> <u>③クラスメートの意見や発表を積極的に理解しようとしている。</u> ④間違いを恐れず英語を使おうとしている。	①読んで理解したことに基づき，英語の要約文の空所を埋めることができる。 ②内容が伝わるように音読することができる。 <u>③絵や写真の内容を英語で説明するとともに，自分の考えや意見を伝えることができる。</u>	①事実関係を正確に読み取ることができる。 ②内容を正確に聞き取ることができる。 ③質問や指示などに適切に応答することができる。	①新しい語彙や熟語の発音・意味を理解している。 ②分詞と to不定詞の形容詞用法を理解している。 ③受動態の文の構造と意味を理解している。

4 単元（題材）の指導計画（全9時間）

時	主な学習内容
第1時	導入 文法事項の確認
第2時	Part 1 新出単語・表現・内容の把握，音読(chunk reading・sight translation)
第3時	Part 1 書き込みノートの確認，本文音読(reading relay・shadowing check・read and look up)，要約，表現活動
第4時	Part 2 新出単語・表現・内容の把握，音読(chunk reading・sight translation)
第5時	Part 2 書き込みノートの確認，本文音読(reading relay・shadowing check)，

	要約, 表現活動
第6時	Part 3 新出単語・表現・内容の把握, 音読(chunk reading・sight translation)
第7時 本時	Part 3 書き込みノートの確認, 本文音読(reading relay・shadowing check), 要約, 表現活動
第8時	“Put It All Together” Make It Your Own” 内容把握, 文法確認 表現活動
第9時	“Communication Corner” “Reading Skills” 内容把握, 表現活動

5 教材（単元・題材）観（単元概要）

モンゴルからの女子留学生, エンフボルド・ボロルトヤさんが, 山形県立東根工業高校に来て, 生徒たちの前で自分の将来の夢を語り, 自分の国で問題になっている大気汚染問題を解決したいと語った。その彼女の抱負を聞いた生徒たちは感動し, 自分たちにできることはないか考え, 太陽光パネルを作ってモンゴルに持って行くことになる。このプロジェクトは成功し, モンゴルの彼女の母校だけにとどまらず, 生徒たちはバングラデシュにも出向き, 太陽光発電システムを紹介・助言し, 大きな国際貢献を果たした。

自分たちと同じ高校生たちが学校で習得した技術によって, 国際貢献を果たした事実を知ること, 自分たちにも何かできるのではという発想から, 将来への明るい展望を持ち, 社会貢献への意欲を持たせたい。

6 生徒観（生徒の実際）

本学級は普通科クラスで, 多くの生徒が進学を希望している。習熟度・学習意欲や英語への関心はさまざまであり, 自分の考えを伝えたり, 発表することに苦手意識を持つ生徒も多いが, 全体的に授業での活動に積極的に取り組んでいる。また互いに助け合いながら学ぼうとする雰囲気がある。

7 指導観

将来について考える機会は多くあるが, 仲間とそれについて語る時間は多くない。そこで本課を通して, 将来の展望を仲間と語ることでそれを再確認し, また自分の意見を述べるのが苦手な生徒にとっては, より身近な話題であることから発言できる機会になると考えた。

8 本時の実際

（1）本時の目標

- ①教科書の内容を伝えることを意識して音読することができる。
- ②絵を見ながら, 読み取った内容を英語で話すことができる。
- ③どのような社会貢献ができるか, 将来について友達と話すことができる。
- ④グループで将来についてさらに具体的な説明を英語で加えることができる。

(2) 本時の評価規準

ア コミュニケーション への関心・意欲・態度	イ 外国語表現へ能力	ウ 外国語理解の能力	エ 言語や文化についての 知識・理解
<u>意欲的に自分の意見を書いたり話そうとしている。</u> <u>クラスメートの意見や発表を積極的に理解しようとしている。</u>	内容が伝わるように、音読することができる。 <u>絵の内容を英語で説明し、自分の考えや意見を話すことができる。</u>	内容を正確に聞き取ることができる。 質問や指示などに適切に応答することができる。	

(3) 本時の展開

時間 (分)	活動	生徒の活動	教師の活動	評価規 準	技 能
5	あいさつ Conversation drill	・挨拶をする。 ・クラスメート数人と会話をす る。 ・会話した <u>クラスメートについ て話をする。</u>	・挨拶をする。 ・質問を指示する。 ・数名の生徒に発表させる。		L S
7	Review and Presentation of today's goals	・書き込みノートの答え合わせ をする。 ・目標を理解する。	・書き込みノートの答えを提示 する。 ・目標を提示する。		L S
8	Oral Reading	・ペアで本文を一文ずつ交互に 読む。 ・ペアでシャドーイングをチェ ックする。	・音読の方法を指示する。 ・本文の CD を流す。	イ-②	L S R
8	Output Activity A	・サマリーの文を参考にしながら、 <u>絵を見て、本文の内容を英語で話す。</u> ・ペアの一人が聞き役になり、 終わったら交代する。	・机間巡視を行い、作業に困難 を感じている生徒へアドバイス する。 ・それぞれのパートナーに話を させる。	イ-③	L S
20	Output Activity B	・どんな職業についてどのよう に社会貢献したいかを書いた 4 人の英文を黙読し、何の職業な のか考える。 ・4人グループで答え合わせを する。 ・ <u>自分がどんな職業に就き、ど のように社会貢献したいかを書 く。</u> ・グループで発表する。	・後で自分がどんな職業に就き、 どのように社会貢献したいかを 書いてもらうことを伝える。 ・4人グループを作らせる。 ・自分がどんな職業に就き、ど のように社会貢献したいかを書 かせる。 ・グループで一人の英文を取り	ア-② ア-③	R W S L

		・グループで一人の英文を取り上げ，さらに具体的な内容の英文を一つ加える。 ・<u>グループの代表が発表する。</u>	上げることを伝える。 ・グループの代表が発表することを伝えておく。 ・いくつかのグループに発表させる。		
2	Closing	・課題を確認する。 ・挨拶をする。	・課題の指示を行う。 ・挨拶をする。		

数 学 科 学 習 指 導 案

日 時：平成 29 年 2 月 28 日（火）第 2 校時

学 校 名：鹿児島県立松陽高等学校

対象学級：普通科 2 年 1 組 41 名

授 業 者：福山 健太郎

1 単元名 「対数関数」

2 生徒の実態

2 年普通科文系の習熟度上位クラスであり、授業や課題等何事にもよく集中して一生懸命取り組む生徒が多い。ややおとなしい性格の生徒が多く、周囲と積極的にコミュニケーションを取って学び合い、互いに協力して課題解決に臨む取り組みに関してはまだ課題が残るものの、年度当初に比べると主体性は高まってきている。国語や英語などに比べると数学を苦手としている生徒が多く、基礎事項の定着に関しては個人差が大きい。今後、幅広い学力層の中でどのように授業を展開・実践し、学力を高めていくかが課題である。

3 単元の目標

- (1) 対数を定義し、その基本的な性質を理解させ、対数の値を求めることや簡単な式の計算ができるようにする。
- (2) 対数関数を定義し、それが指数関数と直線 $y = x$ に関して対称であることを理解させる。また、対数関数のグラフがかけられるようにする。さらに、簡単な対数方程式、対数不等式を扱う。
- (3) 常用対数を定義し、数を $a \times 10^n$ の形に表すことを利用して、常用対数表から常用対数の値を求められるようにする。また、大きな整数の桁数の計算などを通して、その利用を図る。

4 単元の指導計画（全 6 時間）

節	項	時間
対数関数	① 対数とその性質	1
	② 対数関数（1）	2
	③ 対数関数（2）	【本時（1 / 2）】
	④ 常用対数	1

5 本時の実際

- (1) 題材：対数関数の最大・最小
- (2) 目標：グラフを利用して、対数関数の最大値・最小値を求めることができる。 【表現・処理】

(3) 指導の実際

過程	時間	学 習 活 動	指導上の留意点及び評価の観点等
導 入	15分	・ 予習問題 ①, ② の確認を行う。 ① 次の関数の最大値と最小値を求めよ。 (1) $y = \log_2 x$ ($1 \leq x \leq 4$) (2) $y = \log_{\frac{1}{3}}(x+1)$ ($0 \leq x \leq 8$) ② 関数 $y = (\log_2 x)^2 - 2\log_2 x$ ($1 \leq x \leq 8$) について、次の問いに答えよ。 (1) $\log_2 x = t$ とおくと、y を t の式で表せ。 (2) t の値の範囲を求めよ。 (3) y の最大値と最小値、およびそのときの x の値を求めよ。	・ ① については、単なる代入計算（定義域の端の値を求めるだけ）にとどまる解答が予想される。底と1の大小関係に注意し、グラフをイメージしているか確認する。 ・ ② (2) については底と1の大小関係に注意して t の変域を求めているか。また、(3) については指数と対数の関係（対数の定義）を理解しているか。
展 開 I	15分	本時の目標 グラフを利用して、対数関数の最大値・最小値を求められるようになる。 ・ 問題を解く。 問題 9 4 次の関数の最大値と最小値を求めよ。 (1) $y = \log_3(x+1)$ ($0 \leq x \leq 2$) (2) $y = (\log_{\frac{1}{3}} x)^2 - \log_{\frac{1}{3}} x^3 + 2$ ($\frac{1}{9} \leq x \leq 3$)	・ 本時の目標を確認する。 ・ (2) については、生徒の状況に応じて、予習問題②のような設問を加え、誘導する。 ・ (2) で t の変域を求める際、底が1より小さいことを考慮しているか。 ・ $(\log_{\frac{1}{3}} x)^2$ と $\log_{\frac{1}{3}} x^3$ を混同していないか。 ・ 指数と対数の関係（対数の定義）を利用して $\log_{\frac{1}{3}} x = \frac{3}{2}$ を満たす x の値を求めることができるか。

展 開 Ⅱ	1 2 分	・ 予習プリント 3 を解いて，理解を深める。 3 関数 $y = (\log_2 \frac{x}{8})(\log_2 2x)$ ($1 \leq x \leq 8$) の最大値と最小値を求めよ。	・ 生徒の理解の状況に応じて $\log_2 \frac{x}{8} = \log_2 x - \log_2 8$ $\log_2 2x = \log_2 2 + \log_2 x$ であることや，$\log_2 x = t$ において 2 次関数の最大値・最小値の問題に 帰着されることを確認する。
ま と め	3 分	・ 本時のポイントを確認する。 ・ 関数 $y = f(\log_a x)$ の最大・最小 $\Rightarrow \log_a x = t$ において t の関数に！ ・ グラフを利用して考える！（変域に注意）	・ $\log_a x = t$ とおくことにより，対 数関数の最大最小の問題が，t の 関数の最大最小の問題に帰着さ れることを確認する。

6 評価

グラフを利用して，対数関数の最大値・最小値を求めることができたか。 【表現・処理】

保健体育科学習指導案

期 日 平成29年1月24日（火曜日）5校時
場 所 鹿児島県立松陽高等学校体育館
対 象 1年1・2・3組バスケットボール選択者
(男子20名, 女子13名 計33名)
授 業 者 須 貝 佳 奈 子

1 単元名 球技 ア. ゴール型（バスケットボール）

2 単元について

(1) 系統性について

ゴール型球技は、小学校段階では、低学年・中学年で「ゲーム」、高学年で「ボール運動」という領域で構成され、それぞれ「ボールゲーム」「ゴール型ゲーム」「ゴール型」、中学段階で「ゴール型」という内容で扱われている。そして、小・中学校の内容を踏まえて、高等学校では「作戦や状況に応じた技能や仲間と連携した動きを高めてゲームを展開できるようにする」ことを目指して、取り扱われている。なお、中学校第3学年との接続を踏まえ、入学年次においてはこれまでの学習の定着を図ることが求められており、入学年次とその次の年次以降に分けて学習のねらいが段階的に示されている。

(2) 教材について

球技は様々な種目があることから、攻防を展開する際に共通して見られるボールや用具などの操作とボールを持たないときの動きについての学習課題に着目し、その特性や魅力に応じて、ゴール型、ネット型及びベースボール型などから構成されている。バスケットボールはゴール型に分類され、ドリブルやパスなどのボール操作で相手コートに侵入し、シュートをして一定時間内に相手チームより多くの得点を競い合うゲームである。他のゴール型球技に比べてコートが狭いため、スピード感あふれるプレイや緻密な連携プレイで攻防を楽しむことができる。また、攻防の切り替えがとても速く、豊富な運動量と瞬時に変化する場面に応じた判断力が必要とされる教材である。

(3) 生徒の実態

本学級の生徒は、体育やバスケットボールに対する興味・関心が高く、授業へ意欲的に取り組む姿勢が見られる。パス、ドリブル、シュート等の基本的技術が十分に身につけていない生徒が多くいるが、バスケットボール部員7名が中心となっており、上手くできない生徒へ丁寧に教えるなど、互いに協力し合いながら活動できている。

以下、生徒におこなったバスケットボールに関するアンケート結果である。

《アンケート》

Q1 体育の授業は好きですか？	ア 好き イ どちらかといえば好き ウ どちらでもない エ どちらかといえば嫌い オ 嫌い	ア 22名 (66.6%) イ 9名 (27.3%) ウ 1名 (0.3%) エ 0名 (0%) オ 1名 (0.3%)
Q2 バasketボールは好きですか？	ア 好き イ どちらかといえば好き ウ どちらでもない エ どちらかといえば嫌い オ 嫌い	ア 18名 (54.5%) イ 11名 (33.3%) ウ 3名 (0.9%) エ 1名 (0.3%) オ 0名 (0%)
Q3 バasketボールをしていて楽しいと感じるのはどんな時ですか？	・ボールが自分に回ってきた時 ・ドリブルで抜けた時 ・ ・パスが上手くつながって、シュートが決まったとき ・ボールを奪えたとき	
Q4 バasketボールで何をすることが難しいですか？（複数回答可）	ア シュートを決める イ パスを出す ウ ドリブルをする エ フェイントやドリブルで相手を抜くこと オ 状況判断	ア 15名 (45.4%) イ 7名 (21.2%) ウ 14名 (42.4%) エ 14名 (42.4%) オ 15名 (45.4%)
Q5 授業でどのようなことを学びたいですか？（複数回答可）	ア 基本的な技術を身に付けたい イ 集団的技術を身に付けたい ウ 個人・集団的技術を生かして試合を楽しみたい エ 作戦を立てながら試合を楽しみたい オ 友達とアドバイスし合いながら練習したい カ ルールを理解し、安全に配慮して取り組みたい	ア 22名 (66.6%) イ 16名 (48.5%) ウ 12名 (36.5%) エ 11名 (33.3%) オ 17名 (51.5%) カ 15名 (45.5%)

（４）指導にあたって

本単元では、ボール操作の基本的な技術の習得と、チームで連携した動きを用いてゲームを展開することで、Basketボールの魅力や攻防の楽しさを味わえるようにする。

ア ドリブル、パス、シュートの基本練習を毎時間行い、単元後半の試合で発揮することができるようにする。また、ボール操作を安定させることで視野の確保につなげ、怪我の予防に努める。

イ Basket部員を中心とした教え合いの学習など、生徒の自主的な活動を促し、互いに協力しあいながら活動できるようにする。

3 単元の目標

- （１）勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、安定したボール操作と空間をつくりだすなどの連携した動きによって、ゴール前への進入などから攻防を展開できるようにする。
- （２）自主的に取り組むとともに、フェアなプレイを大切にしようとする、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすること、健康・安全を確保することができるようにする。
- （３）技術などの行い方、課題解決の方法、競技会の仕方などを理解し、チームや自己の課題に応じた運動を継続するための取り組み方を工夫できるようにする。

4 単元の評価規準

	関心・意欲・態度	思考・判断	技能	知識・理解
内容のまとまりごとの評価規準	球技の楽しさや喜びを深く味わうことができるよう、フェアなプレイを大切にしようとする事、役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとすること、作戦などの話し合いに貢献しようとする事などや、健康・安全を確保して、学習に自主的に取り組もうとしている。	生涯にわたって球技を豊かに実現するための自己の課題に応じた運動の取り組み方を工夫している。	球技の特性に応じて、ゲームを展開するための作戦に応じた技能や仲間と連携した動きを身に付けている。	技術の名称や行い方、体力の高め方、運動観察の方法、試合の行い方を理解している。
単元の評価規準	・学習に自主的に取り組もうとしている。 ・フェアなプレイを大切にしようとしている。 ・自己の責任を果たそうとしている。 ・作戦などについての話し合いに貢献しようとしている。 ・互いに助け合い教え合おうとしている。 ・健康・安全を確保している。	・提供された作戦や戦術から自己のチームや相手チームの特徴を踏まえた作戦や戦術を選んでいる。 ・仲間に対して技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘している。 ・作戦などの話し合いの場面で、合意を形成するための適切な関わり方を見つけている。 ・健康や安全を確保するために、体調に応じて適切な練習方法を選んでいる。	・ゴール前への侵入などから攻防を展開するための安定したボール操作と空間を作り出すなどの連携した動きができる。	・技術の名称や行い方について、学習した具体例を挙げている。 ・球技に関連した体力の高め方について、学習した具体例を挙げている。 ・運動観察の方法について、理解したことを言ったり書き出したりしている。 ・試合の行い方について学習した具体例を挙げている。
学習活動に即した評価規準	①バスケットボールの学習に自主的に取り組もうとしている。 ②フェアなプレイを大切にしようとしている。 ③記録などの役割を積極的に引き受け自己の責任を果たそうとしている。 ④チームの話し合いで自分や仲間の意見を調整し、話し合い活動に貢献しようとしている。 ⑤健康・安全を確保し、事故防止を図ろうとしている。	①提供された作戦や戦術から自己のチームの特徴を踏まえた作戦や戦術を選んでいる。 ②仲間に対して技術的な課題や有効な練習方法の選択について指摘している。 ③作戦などの話し合いの場面で、合意を形成するための適切な関わり方を見つけている。 ④健康や安全を確保するために、体調に応じて適切な練習方法を選んでいる。	①シュート・パス・ドリブルなどの安定したボール操作ができる。 ②アウトナンバーの動きを理解し攻めることができる。 ③味方から離れる動きや人のいない場所に移る動きで空間を作り出す動きができる。 ④相手の動きに対してマークして守る動きと所定の空間をカバーして守る動きができる。	①技術の名称や行い方について、学習した具体例を挙げている。 ②バスケットボールに関連した体力の高め方について、学習した具体例を挙げている。 ③運動観察の方法について、理解したことを言ったり書き出したりしている。 ④試合の行い方について、学習した具体例を挙げている。

5 単元の指導計画と評価計画（全25時間）

時間		ねらい ・ 学習活動	学習活動に即した評価規準			
			関心意欲態度	思考判断	技能	知識理解
はじめ	1～5	ねらい1 安定したボール操作を身に付けよう。 ○バスケットボールの特性を理解し、学習の進め方を理解する。 ○シュート、ドリブル、パス、ピボットなどの基本的技術を練習する。 ○試しのゲームを行い、個人及びチームの課題を見つける。	①			
				④		①
			⑤		①	
						①
				④	①	
なかⅠ	6～12	ねらい2 アウトナンバー（数的優位）の動きを理解し、攻防を展開しよう。 ○2対1のアウトナンバーで攻める。 <本時> ○3対2のアウトナンバーで攻める。 ○ディフェンスが戻る前に速く攻める（速攻） 3対3から3対2を狙った速攻	④			
						③
				②		
			④			③
				④		
			①		②	
					②	
なかⅡ	13～18	ねらい3 チームで連携したプレイを使って、スペースに応じた攻防を展開しよう。 ○3対3手合わせゲーム，ハーフコート3対3 ○自分の相手を守る（マンツーマンディフェンス） ○ディフェンスのシリンダーやゴールラインの原則を知る。 ○ゲームの中でアウトナンバーの状況を作り出して攻める。	②			
				②		
			④			③
					③	
			⑤			
				③		
まとめ	19～25	ねらい4 自チームや相手チームの特徴に応じた作戦を立てて、攻防を展開しよう。 ○試合の進め方やルールを理解する。 ○ゲームの内容から自チームの課題と相手チームの特徴を理解し、作戦やチーム練習を工夫する ○競技会を開催する。	④	③		
				①		④
					③	
			③		④	
						②
			②			④
				①	③	

6 本時について (11時間目/全25時間)

(1) 本時の目標

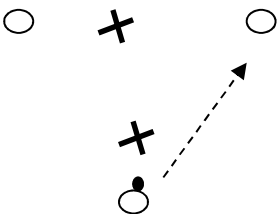
ア パス、ドリブルを使い分けてノーマークプレイヤーを作り、フリーでシュートに持ち込むことができる。

イ 場や用具の安全に留意して活動することができる。

ウ アウトナンバーの攻め方を理解することができる。

(2) 教材 ボール、タイマー、得点板、ホワイトボード

(3) 本時の実際 (11時間目)

段階	時間	学 習 活 動 と 内 容	教 師 の 支 援 ・ 指 導	評 価 の 観 点
導 入	10分	◇整列, 挨拶 ◇出席確認 ◇準備運動	◇見学者の確認, 見学者へ指示を出す。	○服装や姿勢がしっかりできていたか
展 開	10分	◇基本練習 ①対面パス (各1分) チェストパス バウンドパス (両手又は片手) ②2人1組ピボット練習 20秒×2セット ③シュート 各3分 ジャンプシュート レイアップシュート	◇巡回しながら助言する。 ＜パス＞ ・自分の胸から相手の胸へ, 床と平行に, 足もしっかり使いボールを送り出す。 ・レシーバーは手の平をパッサーに向けてボールを引いてくるようにキャッチ ・レシーバーとの距離の3分の2地点にバウンドさせる。 ＜ピボット＞ ・顔を上げる ・肘をはる ・ボールを保持する場所 ＜シュート＞ ・シューターの前の空間にパスを出す ・リングまでの距離が遠い場合はドリブルをつく。	○場の安全に留意しながら活動しているか
	5分	◇3対2パッシング 1分×3セット ・Defの1人はボールマンにつく。もう1人は2人を守れる位置につく。 ・Ofe3人はドリブル禁止 	◇ボールを奪われないようにピボットを駆使して, 確実にパスを出すよう助言する。	

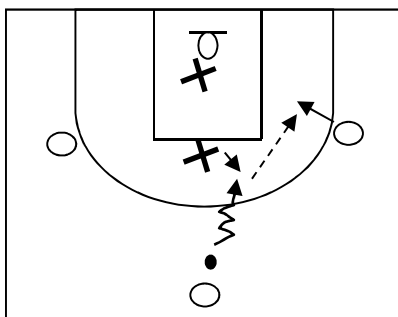
10
分

◇本時の学習内容を理解する。

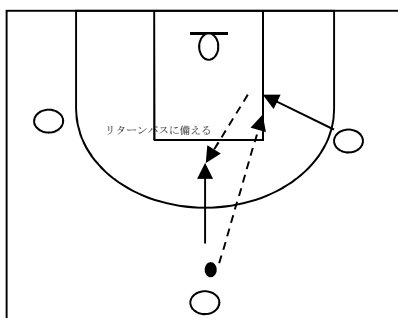
パス、ドリブルを使い分けて
ノーマークプレイヤーをつく
り、フリーでシュートに持ち
込もう。

◇アウトナンバー3 対 2 の攻め方
を、バスケット部員の動きを見
ながら聞こう。

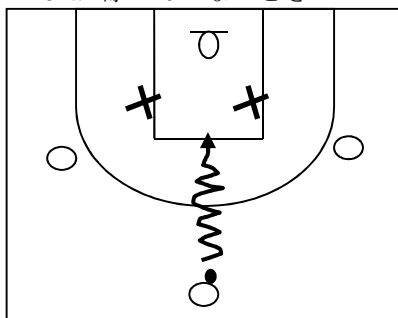
<Def が寄ってきたとき a.>



<Def が寄ってきたとき b.>



<Def が寄ってこないとき>



◇本時のねらいを確認させる。

- ・レイアップやゴール付近からのシュー
ト等、確率の高いシュートにつなげる

◇バスケット部員の動きを見せながら、攻
め方を説明する。

- プレイヤーの動き
- - - - -> パス
- × ディフェンス
- ~~~~~> ドリブル

<ディフェンス>

ボールマンをなるべくフリーにさせな
いよう 2 人で連携して守る

<オフェンス>

①3 人が等間隔を保つ (2 人が近すぎたり
離れすぎたりしないこと)

- ・近い → 1 人で 2 人を守れてしまう
- ・遠い → パスの距離が長くなってし
まうのでカットされる

②ボールマン

フリースローサークル付近で Def を観
察し、シュート、ドリブル、パスの判断
をする。

□ Def が寄ってきた

a.両ウィングどちらか Def が寄って
ない方にパス

b.パスしたあとミドルマンはフリー
スローライン付近にとどまり、リ
ターンパスを受けてシュート

□ Def が寄ってこない

→ドリブルから素早くシュート

③レシーバー

- ・フリーだったら → シュート
- ・ディフェンスきたら → パス

○本時のねらいの動き
を理解しようとして
いるか。

《評価規準》

①関心意欲態度

学習に主体的に取り
組もうとしている。

《評価方法》

観察

	10分	◇男女に分かれて、ハーフコート 3対2を練習する。	◇コートを巡回しながら、どこがノーマークだったか、どの生徒がチャンスだったか等、助言する。	《評価規準》 ③技能 《評価方法》 観察 ○場の安全に留意しながら練習しているか
まとめ	5分	◇本時の振り返り ◇次時の学習内容を確認する 次時：3対2から3対3 ディフェンスが戻る前に速く攻める ◇挨拶	◇本時の学習を振り返らせ、成果を確認させる。 ◇本時の授業とのつながりをもたせ、次時の学習内容を説明する。	○本時の成果と次の課題が明確にできたか ○服装や姿勢がしっかりとできていたか

音楽科ヨーロッパ研修旅行報告

音楽科2年担任 宮原真紀

平成28年度音楽科海外研修は、音楽科2年生20名、引率として団長の小山昭洋教頭先生、副担任の赤池信一先生、担任教諭の宮原の計23名で実施された。音楽科は本県唯一の学科であり、この研修を通して生徒達が本物の音楽に触れ、現在志望している大学・短期大学等への進学意志を固め、精神や技能の向上に努めていくことを考えると、これが音楽科の中心的な行事であり、この研修の実現を支援していただいている関係者の方々にまず心から感謝申し上げたい。

本年度の研修旅行は12月5日から12月9日までオーストリアのウィーンとザルツブルグを中心に行われた。日頃、学習している音楽についての歴史や史実、背景に触れ、また実際の歌劇場での演奏鑑賞やウィーン国立音楽大学教授のご指導などを享受する機会にも恵まれ、実りある研修となった。

天気にも恵まれ、寒さこそあったもののウィーンやザルツブルグの街の美しさを享受するには十分な気候の良さであった。

<12月5日(月)>

朝6時40分にそれぞれの期待を大きなスーツケースに詰めて、生徒たちは元気に鹿児島空港集合。保護者の皆様のあたたかなお見送りの中、出発へ心をときめかせた生徒達の顔が輝いている。団長である小山教頭先生から出発に向けて心構えとなるお話をいただき、多くの見送りの中での出発。海外へ行くことが初めての生徒がほとんどの中、今回は羽田から出発するため羽田空港へ向け出発。羽田では税関手続きなどもスムーズに終え、乗り継ぎ地であるミュンヘン空港で向けて出発。12時間に及ぶフライトだ。

機内では、この研修のために授業で調べ学習をして作成したしおりを読んだり、映画を鑑賞するなどし、やがて経由地であるミュンヘン空港へ到着。生徒達は初めてのドイツの地に顔を輝かせ、ウィーンへの乗り継ぎをすませオーストリア航空にてウィーンへ向かった。ミュンヘンからはウィーンへは1時間ほどである。20時30分頃、目的地であるウィーンに到着しそのままホテルへ向かった。夜景の美しさと日本では味わえない寒さに感銘を受けながら、夕食時は興奮さめやらぬ様子でこれまでの行程について、また明日からの研修について話は尽きなかった。

<12月6日(火)>

一夜明け、朝日に輝くウィーンの街は壮麗の一言であった。午前中はウィーン楽友協会を見学した。ウィーンフィルハーモニー管弦楽団の本拠地でもありニューイヤーコンサートでも有名なこのホール。マーラーやブラームスも演奏したことのあるこの歴史あるホールに1歩踏み入れた時の感動は忘れられない。「黄金のホール」と呼ばれる金色に輝く美しい調度と、奇跡的な音響に全員が心を奪われた。

昼に、ウィーン国立音楽大学で合唱のレッスンが行われた。世界有数の音楽大学での世界的な合唱の権威であるアロイス・グラスナー教授の丁寧なご指導は私達に、伝統の中から培われてきた「音楽」の栄華を充分に感じさせていただける貴重なものであった。表現する楽しさとハーモニーの美しさを表現する喜びに浸った。コーディネーターをお引き受けくださったウィーン少年合唱団の指導者でもあられる栗林純子先生にも丁寧なご説明をいただき、ありがたい先生方のお心に感謝するばかりであった。

夜は昼間見学した楽友協会演奏会があり、その黄金のホールでのオーケストラの豊かな響きに酔いしれた。

< 12月7日（水） >

ヨーロッパを代表するハプスブルグ家の夏の王宮であるシェーンブルン宮殿をまず見学した。壮麗で豪華な宮殿の中を見学し、そのあまりの美しさに生徒達は息をのみヨーロッパの厳然とした歴史の深さを感じていた。またその中から生まれてきたものが私達が今まさに学んでいる芸術、音楽なのだと実感として感じているようだった。

音楽を形成する成長段階にあるこの高校時代に、西洋音楽の礎となるこのウィーンで多くの感動を味わえることの凄さを痛感した瞬間であった。その後、街の中心部にある歴史あるシュテファン大聖堂見学。モーツァルトの結婚式や葬式も行われたというこの聖堂には世界中から多くの見学者が訪れ、敬虔な祈りの空気に包まれながらも、華やかな雰囲気はただよっていた。その後、ハイリゲンシュタットに向かい、ベートーヴェンが主に夏に暮らし、自分の聴力の衰えから「遺書」と呼ばれる文書を残した家を訪ねた。

昼からは、楽器店の音楽ホール（カイザーザール）にて、世界的に活躍されているピアニスト、ノーマン・シェトラ先生にピアノのご指導をいただいた。通訳として、ウィーン国立音楽大学で教鞭を執られている山田佐和子先生にも大変お世話になった。4名の生徒がご指導をいただくのを聴講した。本場での空気に触れ、最高の指導者のもとに学び、生徒達の音は、たちまちのうちに大きく変容していった。実際の湿気や空気感、そういった要素全てが日本とは違い、その違いがより深い音を引き出しているのだと実感した。

夜は、研修の大きな目的のひとつでもある、ウィーン国立歌劇場でのオペラ鑑賞である。演目はヴェルディ作曲の「ファルスタッフ」。華やかで壮麗な歌劇場の中は満場の客で、暮らしの中で音楽がいかに価値をもって扱われているか、改めて感じた。現代的に演出された一流の演奏に触れ、生徒達は興奮冷めやらぬ様子で帰途についた。本物の音楽の極みに触れ、生徒達の演奏の目標となったことはいうまでもない。

< 12月8日（木） >

天気に恵まれた研修旅行中、唯一中央墓地を訪れるこの朝だけは、冷たい雨に包まれていた。モーツァルトやベートーヴェンの墓碑がある広大な墓地を訪ね、偉人が残してきたその業績と足跡をしのんだ。次に、王宮の中にある古楽器博物館を訪ねた。楽器の歴史や背景を知る大変興味深い展示であった。実際に演奏することのできる楽器もあり、生徒達は充分に楽しんでた。その後、グスタフ・クリムトがベートーヴェンの「第九」を題材として描いた絵のある分離派会館での研修を行い、実際に自分達が演奏した音楽の源流がここにあるという現実感動し、このような芸術を生み出した人間の営みに祈りのような心の震えを感じた。午後より、次の研修地であるザルツブルグへ移動。元気に生徒たちはウィーンを後にし、4時間ほどのバスでの移動中はザルツブルグへまた思いを馳せた。

< 12月9日（金） >

モーツァルトが生まれ、幼少を過ごしたザルツブルグは落ち着きのある大変美しい街であった。彼が残した多くの作品に思いを馳せながら、モーツァルトの生家に赴いた。生き生きとした活躍ぶりを解説した資料や、実際に彼が使用していた楽器などをみることができ、史実としての音楽ではなく、間違いなくその時代に活躍した作曲家が生活の中で音楽を生み出していたということを肌で感じた。

また、今年度は初めてザルツブルグ祝祭劇場の見学をすることができ、世界有数の規模をもつ大きな劇場を丁寧に見てまわった。特筆すべきことに、映画「サウンドオブミュージック」で実際に舞台に使われたステージに立ち、生徒全員でウィーンの研修でご指導いただいたばかりの合唱を演奏させていた

だけの奇跡のような時間を過ごすことができた。生涯忘れることのできない経験になったと思う。

昼食を取り、帰国のためミュンヘン空港へバスで向かった。研修で学んだかけがえのない思い出を胸に、帰国の途についた。

< 12月10日（土） >

一路日本へ。羽田空港に15時40分に到着し、税関で入国手続きを済ませ、19時00分発の便で鹿児島へ。21時00分到着した鹿児島空港には多くの出迎えの保護者の皆様や先生方や多くの方々が待っていてくださった。生徒達全員を無事連れて帰ってこられたことにまず安堵しながら、懐かしい鹿児島の空気を吸った。解団式をここで言い、このあと皆それぞれの帰路に着いた。

今回の研修旅行では天候にも恵まれ、日頃学習してることを実体験として学ぶかけがえのない貴重な学習の機会となった。また、団体で行動することの大切さや、互いを思いやる気持ちの大切さなど多くのことを学んだ経験となった。ヨーロッパの地をこの高校時代に訪れ学んだことが、今後の演奏や日常の学習に十分に生かせることができるよう期待している。また、このような機会を与えていただいた保護者の方々をはじめ、理解や支援いただいた関係者の方々に感謝する気持ちを持ちながら、今後の人生をよりよいものにしていくべく努力を続けてほしいと思う。





平成28年度普通科修学旅行 報告

2 学年主任 鶴田 美里映

1. はじめに

2 学年普通科は、平成28年12月7日（水）から12月10日（土）までの3泊4日、長野県志賀高原でのスキー研修を中心とする修学旅行を実施した。参加者は、普通科生徒231名（男子99名・女子132名）、団長（大津事務長）以下引率職員9名（男性6名・女性3名）、添乗員3名（男性1名・女性2名）、カメラマン1名（男性）、看護師1名（女性）の計245名である。

研修日程にもとづいて、その概要をここに報告する。

2. 日程

1 日目；12月7日（水）

- 6時15分 鹿児島中央駅西口出発
- 7時00分 鹿児島空港 到着
- 8時10分 鹿児島空港 出発
- 9時45分 羽田空港 到着
- 10時30分 羽田空港 出発（途中昼食 横川 おぎのや）
- 16時00分 硯川ホテル 到着
- 17時00分 スキー講習（スキー開校式）
- 19時00分 夕食
- 20時00分 入浴
- 22時15分 班長会（地下1F大広間で）
- 22時45分 点呼後消灯



前日に武道館にて結団式を行い、学年主任からの諸注意を与え、生徒代表として2年4組の瀬川くんが挨拶をした。

出発当日の生徒の集合場所は3か所で、鹿児島中央駅西口と学校、鹿児島空港とした。早朝の集合であったが、生徒の集合状況はとてもよかった。鹿児島中央駅西口と学校集合のグループは、予定通りに鹿児島中央駅西口を出発した。渋滞もなく、鹿児島空港に到着できた。

鹿児島空港では搭乗前にクラスごとに集合し、添乗員と学年主任から簡単な諸注意を行った。大人数のため荷物預けとセキュリティチェックに時間がかかった。飛行機に搭乗してから、自分の座席に座らず他人の座席に勝手に座っている生徒がおり、後から乗り込んだ生徒が自分の席に座れないという事件があった（ホテルに着いてから指導を行った）。その後、鹿児島空港を少し遅れて出発した。

羽田空港で看護師1名と合流し、志賀高原に向けて出発した。昼食は横川で釜飯をいただいた。食べ終わった容器は記念に持ち帰ることができた。途中で積雪のためチェーンを巻き、予定どおりホテルに到着した。到着後、スキーウェアや靴のサイズ確認等を行い、いよいよゲレンデへ。

幸運なことに積雪も十分あり、1時間半であったが充実した研修を行うことができた。まずホテル裏でスキー教室の開校式を行った。生徒代表として、2年6組の東くんが挨拶を行い、生徒の緊張感もすこしほぐれた。その後、班ごとのインストラクター指導の下、緩斜面での滑り方や止まり方、スキー板を履いての斜面の登り方などを練習した。

その後、夕食をとり、入浴は事前の打合せ通りローテーションで行った。旅行中は、1日目夜から断続的に体調不良の生徒が出て、担任や看護師をはじめ対応に追われた。班長会では、健康管理及び貴重品の管理、明日朝の日程を再度連絡し、1日目を終えた。

2日目；12月8日（木）

- 7時00分 起床
- 7時30分 朝食
- 8時30分 クラス写真撮影（悪天候のためホテル前で）
- 9時00分 スキー講習（午前の部）
- 11時00分 昼食・休憩
- 13時00分 スキー講習（午後の部）
- 17時30分 スキー閉校式
- 19時00分 夕食
- 21時00分 室長会（地下1F大広間で）
- 22時45分 点呼後消灯



朝は外は吹雪いており、視界が悪く、残念ながらゲレンデでの写真撮影はできなかった。しかし時間がたつにつれ、天気も回復しスキー日和となった。本格的な降雪のもとで天候に恵まれ、スキー研修は順調に行われた。

この日はリフトを使って上の方に登っていき、急斜面での滑り方を練習した。生徒たちは慣れないスキー板に苦労しながらも上達し、隊列を組んでの滑走も見事なものになった。生徒たちの上達ぶりには目を見張るものがあり、多くのインストラクターから、飲み込みが本当に早い、と褒めていただいた。体育コース生を始め、多くの生徒が何度もリフトに並び、本場のスキー場での滑りを満喫していた。スキー研修による大きな怪我もなく、参加した生徒たちが思い思いに滑れるようになり、「スキーが楽しかった」「また志賀高原に来たい」と話してくれたことをとても嬉しく思った。閉校式では、スキー学校長から激励の言葉をいただき、生徒代表の2年1組の下永くんが挨拶を行いスキー教室を終了した。その後生徒全員分の講習修了証（班ごとの写真入り）をいただいた。

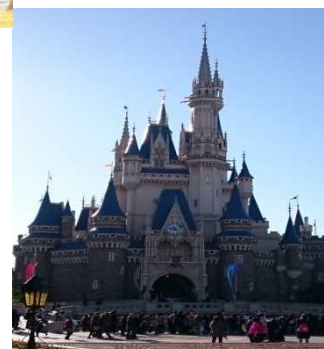
この日は一日中スキー研修ということで、当初からスキーの見学予定の生徒数名と職員、添乗員は、周辺の散策（善光寺等）に向かった。

夜には夕食、入浴を済ませ、室長会で前日同様の連絡に加えて、ホテル出発のための荷物の整理整頓と、少々散見された気の緩み行為への注意指導を行って、2日目を終えた。



3日目；12月9日（金）

- 6時30分 起床
- 7時00分 朝食
- 8時00分 ホテル発
- 12時30分 昼食（楠公レストハウス）
- 14時00分 国会議事堂 到着
- 15時45分 ディズニーランド 到着
- 21時00分 ホテル到着
- 22時45分 点呼後消灯



ホテルを出発し東京都内へと向かう途中、高速道路での事故の情報が入り、バスの運転手さんたちのとっさの判断により急遽高速道路および都内までのルートを変更した。途中のサービスエリアで過ごす時間が少なく生徒を急がせてしまったが、予定時刻を少しだけオーバーする形で昼食会場に到着した。大幅な日程変更が出るのではと道中心穏やかではなかったが、行程通りの一日となり安堵した。

昼食会場は皇居の近くで雰囲気もよく、天候にも恵まれて、昼食後は会場前の公園で談笑する生徒も見られた（が前述の通りゆっくり過ごす時間がなく残念だった）。その後国会議事堂では、衆議院を見学することになった。小学生など見学者も多く、セキュリティも厳重であった。建物全体の装飾も大変素晴らしく、タイムスリップしたような重厚な雰囲気にもまれ、赤絨毯を歩むにつれ生徒の興奮は高まっていた。本会議が開かれる衆議院議場をはじめ、実際にテレビでみる場面を目にすることができて、生徒にとってはよい経験となったようだ。

時間の都合上、写真撮影をディズニーランドでは行わないことに決め、到着後ディズニーランドにすぐ入場した。金曜の午後ということで入場者は多めであった。生徒たちはそれぞれ笑顔で買い物を楽しんでいたが、夕食をとり、各種のアトラクションを楽しむには少し時間が足りなかったかもしれない。

午後9時までにホテルに戻るようにと生徒に連絡したが、戻ることのできない生徒が何人かいた。ホテルまでの道順がわからない生徒もいたが、やはり早めの行動をとれず遅刻した生徒がいた。今回の旅行では緊急連絡用に携帯電話の所持を許可し、さらに何かあったときのためにこちら側の連絡先も知らせておいたが、遅れるという連絡すらできない生徒がおり、大変残念であった。

点呼の後も生徒の体調等が気になったので、数回部屋を巡視し、3日目を終えた。

4日目；12月10日（土）

- 6時30分 起床
- 7時00分 朝食
- 8時30分 東京ベイ舞浜ホテル出発
- 9時15分 浅草 到着 クラス写真撮影
- 11時00分 日本科学未来館 到着
- 12時15分 クラス写真撮影 お台場散策
- 15時10分 羽田空港 到着 修学旅行解団式
- 16時40分 羽田空港 出発
- 18時45分 鹿児島空港 到着
- 19時10分 鹿児島空港 出発
- 20時00分頃 鹿児島中央駅西口（吉野・鹿児島駅前行き、学校まで行きバスも） 到着・解散



朝ホテルを出発する際混雑したが、天候も良く、都内で渋滞もなかったため大変スムーズに旅行日程をこなすことができた。

浅草は朝早かったせいか、珍しく仲見世通りも空いており散策しやすかった。バスの停車位置が最近変わったため浅草寺到着まで少し歩いたが、散策の時間は十分にあったように思う。次の日本科学未来館では、大きな地球儀のある内装とガラス張りの外観に圧倒された。各自プラネタリウムや展示、ショップなどを見て回った。お台場では、各自自由にショッピングや食事、散策を楽しんだようであった。

空港へも、計画どおり到着した。近年導入された自動チェックイン機を使ったため比較的スムーズに搭乗手続きを行うことができたため、搭乗口前で解団式を行った。団長の挨拶に続き、2年2組の川畑さんが旅の感想を盛り込んだ挨拶を行った。

飛行機内では、クラスごとに着席した。疲れも相当あったのだろうか、機内は静かで穏やかだった。

鹿児島空港に到着後、バスを学校直通に1台、吉野および鹿児島駅前行きに1台、鹿児島中央駅への直行便バス4台に分けた。それぞれで解散・帰宅して全研修日程を終了した。

3. おわりに

今回の修学旅行は、天候に恵まれて、かつ降雪量も十分で、スキー研修は大きな怪我もなく順調に進められたことが、何より良かった。体調不良の生徒が何人かおり心配されたが、おおむね大事にはいならず、全員が無事に鹿児島に戻ることができた。ご協力いただいた多くの方々に感謝したい。

修学旅行後、参加者全員にアンケートを行った。生徒にとって印象に残った場所は、ほぼ全員がスキーとディズニーランドを挙げていた。その他の場所については、生徒の興味関心によってまちまちのようであった。今年は昨年度とは違い、都内での研修もいくつか含めたが、6割の生徒はこの日程の方がよいと答えていた。ディズニーランドの滞在時間は実は昨年と変わっていないが、「ディズニーにももう少し長く居たかったから昨年度の日程がよい」と感じた生徒が多かったようだ。

修学旅行を通して、思い出深い点や、自分の成長した点・反省すべき点について生徒にまとめてもらったところ、「次の予定を考えて時間配分をし、行動するようになった。」「友だちとの交流が増えたことで、相手のことをもっと知ることができた。」という意見や、「気持ちが舞い上がってしまっているところがあったので、気持ちの制御ができるようにしたい。」「集合時間ぎりぎりだったので、今後は時間を守るようにしたい」という意見があがっていた。

学年主任として1年半準備をおこなってきたが、旅行中は体調不良の生徒がでたり、ハプニングもあつたりと心配の種はつきなかつた。しかし生徒の楽しそうな姿や、日常とは違う場面で成長する姿を目の当たりにして、充実した研修ができてよかったと思う。今後とも生徒の成長を見守りたい。

平成27年度 美術科1年 風景画合宿研修実施報告

美術科 前 村 卓 巨



本行事は、美術科として夏季休業中を利用して集中的に技能を高める実習の一つとして長年取り組んでいる研修である。

この時期の1年生は、入学直後から油絵による静物画や公募展作品を描いてきており、ようやく油絵の基本的な使い方や性質が分かりつつある段階である。そのような中、学校を離れ、吸い込まれるような夏の海と空の下で、実際現場にイーゼルを立て目前に広がる吹上の風景を描く経験は大変貴重である。遠近感や空間感など、まだ油絵の経験が浅いながらも精一杯描こうとする様子が全員にみられた。一見静かに留まって見える風景が、時間の経過とともに刻々と変化する光や影を必死に追いながらキャンバスのなかに取り込もうとする態度が印象的であった。

一日目の夜の勉強会の後部屋で黙々と描いている生徒もあり、講評会では非常勤講師の先生方も駆けつけ、それぞれ分担して一人一人講評を行った。優れた作品を選び表彰を行うなど大いに盛り上がった。最終日には「荒木窯」訪ね、本校でも指導いただいている荒木秀樹先生に、薩摩焼の作品や実際制作している現場などを見せていただいた。



<目 的> 学校を離れ、広く自然の素材を活用し風景画制作を体験して写生による表現の能力を高めるとともに、美術科生としての意識の高揚を図る。

<日 時> 平成28年7月25日（月）～7月27日（水） 2泊3日

<場 所> 日置市吹上町

制作：薩摩湖周辺及び「吹上温泉と歴史ゾーン」

①正円池周辺 ②吹上温泉街 ③大汝牟遅神社周辺

宿泊：吹上砂丘荘

<参加者> 美術科1年生 男子6名 女子33名 計39名

<引 率> 惠美由紀（担任/国語科），前村卓巨（副担任/美術科），餅原宣久（美術科），上木原堅一（美術科）

<経 費> 生徒一人あたりの経費 13,000 円 （制作材料代・宿泊代 9,600 円
・食事代，2日目の昼食・共用の画材など）

<準 備> 水筒，バスタオル，洗面用具，着替え，寝間着，つば広帽子，長袖服，
雨具，常備薬，画材一式（スケッチブック，鉛筆，イーゼル，クローキ帳など）

<日 程>

7月25日（月）

8:50 松陽高校発 9:30 吹上砂丘荘着 [荷物のをおろし，下見準備]，①正円池
周辺 ②吹上温泉街 ③大汝牟遅神社周辺，④海浜エリアを下見：記念撮影・ス
ケッチ等，※制作場所の決定。

11:00 吹上砂丘荘着， 昼食（持参の弁当），12:30 事前説明の後移動 13:00
スケッチ，下描き，16:30 制作終了，16:45 集合・移動 [着いたものからお風呂]
18:30 夕食，20:00 事前学習（下描きの講評），22:30 就寝

7月26日（火）

6:30 起床，7:00 朝食，8:00 集合・諸注意，8:15 移動，8:30 制作開始，12:00
昼食（注文した弁当），15:45 制作終了，16:00 集合・移動 [着いたものからお
風呂]，18:00 夕食，19:00 講評会・交流，22:30 就寝

7月27日（水）

7:00 起床，7:30 朝食・片づけ，9:20 出発，10:00 美山着，「荒木陶芸」見学
11:00 荒木陶芸発，11:30 松陽高等学校着，12:10 鹿児島中央駅解散。



制作の様子



正円池周辺



大汝牟遅神社



楽しい食事の様子



一人一人，丁寧に講評



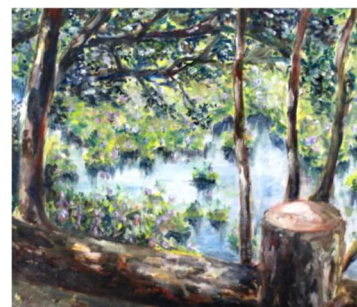
表彰の様子



若松琉夏（風景画大賞）



中村與生（準大賞）



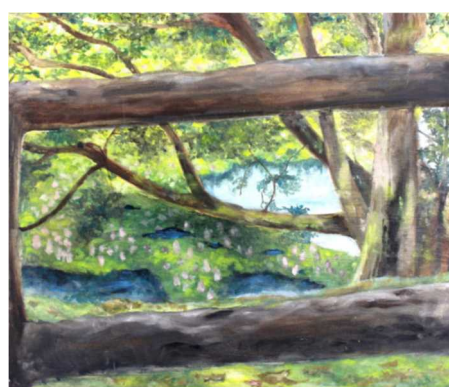
久永伶央（準大賞）



上村 遥（優秀賞）



源川眞子（優秀賞）



福井清楓（優秀賞）

奨励賞：加治愛理，則座初音，竹之内理那，宮脇未羽

特別賞：上野咲妃，松崎和香奈，蓑田佳鈴，雪丸丹寧

生徒の感想

風景画合宿はどういったものだろうととても楽しみにしていました。

1日目は午前中に各所を見てまわり，午後から制作に入りました。夜は先生方からアドバイスをいただきました。2日目は朝から油絵の具を使い制作をしました。強い日差しの中での制作は大変でしたが，地域の方々がパラソルを貸してくださったり，ジュースをおごってくださいたり，おかげでなんとか描き続けることができました。時間が足りず満足のいく作品にはなりませんでした，講評会では「風景画大賞」をいただき，大変うれしかったです。

また，自由時間ではみんなテンションが高く，学校とはまた違う一面を見られてとても楽しかったです。普段あまり会話をしない人とも話す機会があり，より交流を深めることができました。

今回の合宿はとてもためになりそして楽しかったです。この経験を生かしよりよい作品作りに励みたいと思います。貴重な機会を作ってくださいありがとうございました。

若松琉夏



平成 28 年度 英語コース語学研修実施報告 (English Course Summer Seminar)

教諭（英語科） 鶴田 美里映

1 はじめに

本校では、昭和 58 年の開校以来、国際社会に通用する人材の育成を目的に、普通科に英語コースを設置している。その学習の一環として、平成元年より夏休みに 2 年生を中心に英語セミナー実施しており、今回が 28 回目である。

以下平成 28 年度サマーセミナーについて概要及び成果などを紹介する。

2 平成 28 年度英語コース語学研修実施計画の概要

(1) 目的

- (ア) 集中講座による密度の濃い学習を通して、英語についての理解を深めるとともに、語学学習への意欲を高める。
- (イ) 少人数制のグループ学習により、特に英語のリスニング・スピーキングの能力及び自己表現力の伸長を図る。
- (ウ) 外国人講師と起居を共にすることで、英語のみを用いる生活環境を設定し、英語に慣れ親しむとともに、国際的感覚を養う。



(2) 内容

- (ア) 講座制によるグループ学習と全体学習
- (イ) スピーチ（発表）、ディベート、プレゼンテーション
- (ウ) レクリエーション

(3) 対象者：2 年生英語コース生（27 名）・1 年生（1 名） 計 28 名

(4) 期 日：平成 28 年 7 月 28 日（木）～7 月 30 日（土）（2 泊 3 日）

(5) 場 所：霧島自然ふれあいセンター（霧島市牧園町高千穂 3617-1）

(6) 経 費：生徒 1 人当たり（2 泊 3 日） 4,000 円

内訳：シーツ代 100 円 / 食事代 2,980 円 / 予備費 920 円 ※交通費は本校が負担

(7) 服 装：夏季制服，正課体育服（ジャージ上下），動きやすい服装，運動靴

(8) 引率者・講師

英語科職員： 船迫千鶴，鶴田美里映，松元照美，赤池信一，内山健一

A	L	T:	Samantha Johnson	松陽高等学校
			Charis Tarbett	鹿児島中央高等学校
			Terry Rozmus	川内高等学校
			Ken Guerrero	串木野高等学校

3 活動の内容と日程

期日	時刻	研修内容
7月28日 (木)	9:30	・ ALT, JTE 打ち合わせ
	11:30	・ 研修1 (自己紹介, Ice-breaking ①) 於: LL 教室
	12:00	・ 昼食
	12:45	・ バスへ移動, 出席者確認後, 霧島自然ふれあいセンターへ出発
	14:30	・ センター着後, 研修2 (Ice-breaking ②)
	15:00	・ 開会行事 開会の言葉/諸注意
	15:30	・ 研修3 (スピーチ練習①) *一人約10分指導を受ける
	19:00	・ 研修4 (ディベート準備)
	20:15	・ 歌①
	21:30	・ グループミーティング
7月29日 (金)	6:30	・ 起床・洗面・朝の集い・清掃・朝食
	9:00	・ 研修5 (全員によるスピーチ発表) *全体代表3名決定
	13:00	・ 研修6 (レクリエーション) センター発→えびの高原 (晴天時: 池めぐり 雨天時: エコミュージアムセンター)
	16:00	・ えびの高原発→センター
	17:00	・ 研修7 (プレゼンテーション準備)
	19:00	・ 研修8 (ディベートマッチ)
	20:15	・ 歌②
	21:30	・ グループミーティング
7月30日 (土)	6:30	・ 起床・洗面・朝の集い・清掃・朝食
	9:00	・ 研修9 (プレゼンテーション準備)
	11:00	・ 研修10 (反省・感想記入)
	12:45	・ 研修11 (プレゼン発表②) + 歌③
	13:15	・ 閉会行事
	13:30	・ 霧島自然ふれあいセンター出発
	15:00	・ 鹿児島中央駅着・解散

4 主な研修内容について

(1) スピーチ

事前に書き上げたスピーチをまずグループで練習をした後, 全員の前で発表した。

最終的に8月に行われる校内スピーチ大会代表に選ばれた3名のスピーチの内容は「世界を一つに」「友達」「予知夢」など多岐にわたった。生徒は一人一人発音の指導等を受け, 発表の仕方を学ぶよい機会となった。



(2) ディベート

「松陽高校は給食を導入すべきである」というテーマで英語ディベートを行った。英語でディベートをすることはほとんどの生徒にとって初めての体験で, ハードルの高い活動かと思われたが, 最後の試合などを見る限りでは, この活動を通して生徒は着実に総合的な英語力を身につけており, 一人一人に与えられた役割を



しっかり果たすなど頼もしく成長していたようだ。

(3) プレゼンテーション

「どのようにして鹿児島に外国人観光客を呼び込むか」についてのプレゼンテーションを行った。昨年度2年生の英語コース生が、鹿児島県中高生英語プレゼンテーションコンテストに出場した際の作品を再度英語コース全員で練り直したパフォーマンスである。後に校内で8月に行われた英語スキット・スピーチコンテストの中で英語コースの紹介を行う一環として披露し、審査員の鹿児島大学のトレマーコ先生から内容がよいと褒めていただいた。

(4) レクリエーション

えびの高原の池めぐりを行った。ここ数年天候不順で池めぐりができない年が多かったが、今年は快晴で気持ちのよい散策ができた。生徒にとっても、ALTの先生方とも親しむことのできるよい機会となった。



5 おわりに

本研修までの道のりはとても長かった。生徒は1月に面接試験を受け、晴れて英語コース生となり、6月までスピーチの添削を受ける日々。辞書を引きながら英語を日本語に直し、スピーチの内容が伝わらないと言われては表現を変え書き直し、ディベートでは反論を自分で考えなさいといわれて一文をひねり出し、慣れないパソコンを使って自分の言葉を形にし…、そういう作業を1学期の間彼らなりにこなしてきたからこそ、この日「もっと頑張りたい」と目を輝かせて研修に臨む姿があったのだと思う。

とはいえ、この研修の意義は大きい。英語は実技力である。向上のためにはこの研修のように、自分の発表を多くの人に受け止めてもらい個に応じた適切なアドバイスを受ける必要がある。幸いにも、生徒はすばらしいALTとともに3日間を過ごし、きめ細やかな最高のフィードバックを受けた。また英語はコミュニケーション能力でもある。研修所での外国人と過ごす生活やディベートで「チームのために自分は伝え、聴き、役割を果たす」という体験は、言葉に関する感覚を変えた。どうやったら伝わるのだろう、自分はどういえばよいのだろう、と「人に伝えるため」に英語を学ぶ意義に触れたようだ。だからこの研修は彼らの英語力の飛躍の時となった。

自分と向き合い言葉をつむぎ、人とつながる言葉を発する、そんな生徒を今後も育て続けたい。

松陽高校書道コース夏季宿泊研修実施報告

教諭（書道科） 鈴木 寛治

1 目的 作品制作の方法を体得させ書の実技力の向上を図るとともに、参加生徒の交流と親睦を深める。

2 日時 平成28年8月8日（月）～8月9日（火）

3 場所 国民宿舎レインボー桜島
鹿児島市桜島横山町1722-16 TEL 099（293）2323

4 日程 8月8日（月）
8：50 鹿児島港集合
9：00 出港
9：15 桜島港着
9：30 会場着（徒歩）
10：00～12：00 開会、練習Ⅰ
12：00～13：00 昼食
13：00～16：00 練習Ⅱ
16：00～17：00 作品批評会
17：00～18：00 自由
18：00～19：00 夕食
19：00～20：00 練習Ⅲ
20：00～21：00 レクレーション
21：00～22：30 学習
22：30 就寝

8月9日（火）
6：30 起床
7：00～8：00 朝食
9：00～12：00 練習Ⅳ
12：00～13：00 昼食
13：00～14：30 作品研究会、片付け
14：30～15：00 閉会
桜島港→鹿児島港 解散

5 参加者 書道コース生 10名（1年6名，2年4名）
書道部生 10名（1年5名，2年5名） 計 20名

6 引率者 鈴木 寛治（書道コース担当）

7 所感

今回の研修では、例年おこなっている国際高校生選抜書展（書の甲子園）への出品作品の錬成と、その作品に押印する印の制作をおこなった。

初日の午前中は全紙（140cm×70cm）に作品制作を行い、自分であらかじめ用意した課題へと取り組んだ。

最初から指導者が手本を書いて、その手本を見ながら作品制作をおこなう方が作品の仕上がりは早いですが、作品を創造する力を育成するには、ある程度自分で試行錯誤を重ね、時間をかけて作品を作り上げる必要がある。文字の大きさや行数、配置などいろいろなことに注意しながら、徐々に作品らしくなってきたのは昼過ぎのことであった。



午後からは講師に篆刻作家の渡邊星舫先生を迎え、午前中に制作した作品に合う大きさの印を制作した。制作の前に書作品における印の役割や、印の歴史などの講話もあり、授業では説明の至らない内容まで踏み込んだ話を聞くことができた。

渡邊先生による印稿の添削や補刀など、普段の授業や部活動では体験できない行き届いた御指導のおかげで、参加者の印はどの作品に押印しても見栄えの良いものとなった。



最後に渡邊先生に側款を彫っていただき、金泥で仕上げていただいて印が完成した。

夕食の後は恒例の水中花火を鑑賞しながら、手持ち花火で部員の親睦を深めた。



2日目は朝から作品制作を再開し、ある程度、形を成してきた作品をさらに魅力あるものにするためにいろいろな工夫を施していった。墨の潤濁、線の細太、文字の大小、余白などの変化を作品に取り入れ、作品が奥行きのある風景のように見えるよう工夫することで、魅力的な作品に近づくのではないかと考えている。

2日間の研修はあっという間であり、作品を完成させるには時間が全然足りないが、この2日間で学んだことは今後の作品制作に必ず生かされる。

日々の授業や補習、模擬試験や土曜セミナーと、高校生は本当に忙しい。しかし、高校生の上達は非常に早い。

私も忙しさにかまけて鍛錬を怠っていたのは生徒に申し訳ないと思った2日間でもあった。



平成28年度 教職員の研修の記録（研究授業・発表・出品等）

1 研究授業

番号	氏 名	期日	学級	科目名	単元名	研究授業名
1	福 山 健太郎	2/28	2年1組	数学Ⅱ	対数関数	フレッシュ研修（3年目）
2	須 貝 佳奈子	1/24	1年123組	体育	球技 バスケットボール	フレッシュ研修（3年目）
3	古 市 幸 司	10/21	2年4組	日本史B	鎌倉新仏教	授業力向上支援プログラム
4	加 治 大 樹	11/2	2年8組	世界史B	イスラーム文明	松陽高校研究公開
5	有 馬 純 平 川 畑 勉 石 塚 真 也	11/2	2年56組	数学Ⅱ	微分法と積分法	松陽高校研究公開
6	宮 原 真 紀	11/2	2年7組	音楽史	西洋音楽史ウィーン研修について	松陽高校研究公開
7	前 原 卓 巨	11/2	1年8組	絵画	自画像をいれた構想画の制作	松陽高校研究公開
8	岡 留 幸 恵	4/28	1年7組	国語総合	「人と人が出会う手順」 （小川洋子）	パワーアップ研修
9	岡 留 幸 恵	11/2	1年7組	国語総合	「『わらしべ長者』の 経済学」（梶井厚志）	松陽高校研究公開 パワーアップ研修
10	岡 留 幸 恵	2/9	1年7組	国語総合	「鶏口牛後」（十八史略）	パワーアップ研修
11	中 島 真理子	5/13	1年4組	コミュニケーション英語Ⅰ	Lesson2 Why is that so?	パワーアップ研修
12	中 島 真理子	11/2	1年4組	コミュニケーション英語Ⅰ	Lesson5 Brightening the Future	松陽高校研究公開 パワーアップ研修
13	中 島 真理子	1/30	1年5組	英語表現Ⅰ	Lesson12 I wish my parents were more understanding.	パワーアップ研修
14	松 山 為 直	5/14	3年4組	理科（物理）	熱と物質の状態	パワーアップ研修
15	松 山 為 直	11/2	1年6組	理科 （物理基礎）	熱と物質の状態	松陽高校研究公開 パワーアップ研修
16	松 山 為 直	1/26	1年6組	理科 （物理基礎）	音の性質	パワーアップ研修
17	川 内 辰一郎	5/16	2年3組	保健	生涯を通じる健康 妊娠・出産と健康	パワーアップ研修
18	川 内 辰一郎	11/29	1年123組	体育	武道・剣道	パワーアップ研修
19	川 内 辰一郎	2/15	1年78組	体育	球技・バドミントン	パワーアップ研修
20	上木原 堅 一	5/24	2年8組	美術史	西洋美術史・ギリシャ美術	パワーアップ研修
21	上木原 堅 一	11/7	2年8組	素描	木炭・鉛筆素描	松陽高校研究公開 パワーアップ研修
22	上木原 堅 一	2/2	2年8組	美術選択	油絵	パワーアップ研修



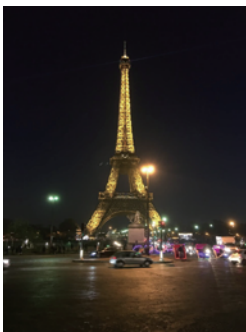
あこがれの美の都、フランスへ！

平成 28 年度 鹿児島県立松陽高等学校美術科研修旅行報告

平成 28 年 12 月 5 日～10日に実施された松陽高校美術科海外研修旅行についてレポートします！



事前に現地の情報や収蔵作品について事前に調査してガイドブックを全員で作成した。時間が限られているため、計画的に研修を行うには必須アイテムである。



パリはクリスマスモード一色でシャンゼリゼ通りやエッフェル塔はイルミネーションで彩られていた。

フランスへの到着は午後2時あたりであったが、現地の緯度の影響もあり、陽の光は夕日のそれに近かったように感じた。航空機の窓から景色を望むと広い農村地帯が幻想的に見え、フランスへやってきたのだと実感した。空港に降り立った生徒達もやや疲れが見えたが、入国審査や荷物の返却もトラブルがなく無事パリ市街へ到着することができた。シャンゼリゼ通りはクリスマスのイルミネーションに彩られ、生徒達も旅の疲れを忘れ、きらびやかな景色に見とれている様子だった。7時には無事ホテルにチェックインすることができ、明日からの研修に備え各自休養をとることとなった。

後、羽田空港での出国検査も大きなトラブルもなく、こちらも定刻どおりに羽田空港を後にした。12時間のフライトは海外旅行が初めての生徒達にとっては少し負担が大きいかわれが、日本の航空会社であったということと機内食や映像等のサービスが充実していたこともあり、あつという間に時間が過ぎていったように感じられた。

その後、羽田空港での出国検査も大きなトラブルもなく、こちらも定刻どおりに羽田空港を後にした。12時間のフライトは海外旅行が初めての生徒達にとっては少し負担が大きいかわれが、日本の航空会社であったということと機内食や映像等のサービスが充実していたこともあり、あつという間に時間が過ぎていったように感じられた。

12月5日 《出発》

- ◆鹿児島空港→羽田空港
- ◆羽田空港→シャルル・ド・ゴール空港



機内食はクマモン仕様のタイビーエン。食事以外にも映像やゲーム等、機内サービスが充実していたので12時間のフライトもあつという間を感じられた。

この機会に恵まれたことに感謝したい

本校では美術科が開設されて以来、2年次にヨーロッパを訪問し、本場の現地の風土や文化に触れ、本物の芸術作品を鑑賞することにより芸術に対する情操を深めたり、現地の講師からデッサンの指導を受け、制作における基礎的能力を高めたりすることを目的として研修旅行を実施している。しかし、昨年度はフランスにおいて同時多発テロが発生したため、生徒の安全を考慮し、やむを得ず中止となった(ニューヨークの同時多発テロ時にも中止となったため、昨年度の中止は2回目)。今年度もフランスの中心部からは少し離れているものの、観光地であるニースにおいてトラックが暴走するといったテロが起こり、観光客を含めた多くの方が犠牲になったため、実施においては対策等も考え慎重に考える必要があった。7月に旅券説明会、9月に出国中止・中途帰国に関する保険等の説明会、10月末に直前説明会と合計3回の説明会(例年は直前説明会の1回のみ)を実施し、段階的に保護者の方がたへの説明と安全に関する共通理解を深めることができた。その結果、保護者の方がたも安全面を不安視する以上に研修旅行に対する意義を理解していただき、旅券の申請等計画的に準備を進めることができた。したがって、今回の海外旅行の実施は、テロに対する不安要素が多分に含まれていたが、旅行者の方の安全面を十分に考慮した実施計画と、保護者の方がたの美術科における研修旅行の意義への深いご理解と協力があつて実施できたということに大変感謝したい。



早朝のモンマルトルは人通りも少なくゆっくりと散策できた。サクレクル寺院までの道程は、ゴッホやモディリアニが住んでいたとされるアパート通称“洗濯船”の外観も観ることができた。

12月6日 《研修1日目》

- ◆サクレクル寺院
- ◆オルセー美術館
- ◆ピカソ美術館
- ◆グランシヨミエール美術学校



駅舎を改築して作られたオルセー美術館は、外観・内装ともに見応えがある。館内をゆっくりと散策すると当時の蒸気機関車の音が聞こえてきそうである。



初日の行程は、現地に慣れないということもあり、講習会を終えるときさすがに疲労が蓄積しているようだったが、ホテルでのおいしいディナーに心も体も栄養補給することができたようだった。



幸運にも渋滞緩和規制が実施されていた

フランスの冬は厳しいと聞いていたので、防寒対策に気を配るように生徒に伝えていたが、快晴の天候にも恵まれ、思ったほど寒くはなかった。また、渋滞緩和のためのナンバー規制がなされていてうそのように渋滞が緩和されていた(現地ガイド談)。生徒の体調もよく、予定通りモンマルトルへ到着した。道路が入り組んでいて、バスの侵入規制もあるため、徒歩でサクレクル寺院へと向かった。早朝のモンマルトルは、人通りも少なく、観光地であるというのを忘れてしまうほどゆっくりと散策することができた。お昼の時間帯は、物売りなどが観光客に近づいてくるためこの時間帯を選んでいただいて正解だった。途中、ムーランド・ギャレットやゴッホたちが暮らしたとされる洗濯船と呼ばれるアパート等も外観を見学することができたので、30分ほどのよい散策コースであった。サクレクル寺院はモンマルトルの高台にあり、そこからパリ市街を眺めるとこれからの現地での研修に胸が高鳴った。パリで最初の美術館訪問は、オルセー美術館だった。駅舎を改築して1986年に誕生した美術館は、ルーブルに次ぐフランスが世界に誇る美術館である。印象派以降の近代美術を中心に収蔵しているため、作品自体も知名度が高い作品が多く見応えがあった。現地のガイドの方が、作品一つ一つを丁寧に解説していただいたので、印象派以降の絵画の変遷等についても理解を深めることができた。その後、昼食をギャラリー・ラファイエットのフードコートでとり、午後はピカソ美術館へと向かった。短時間でラファイエットでの昼食をとることができるか少し心配だったが、物怖じすることなくカウンター越しに食品を注文する姿も見られ、生徒達の逞しさを垣間みた。ピカソ美術館では、ジャコメッティの企画展も開催されており、願ってもない幸運を感じた。館内は、近年リニューアルされたということもあり設備やセキュリティも充実しており、生徒自身も気軽に鑑賞を楽しむことができていたようである。ピカソ美術館を出るころには、時刻は夕刻となり、少し薄暗くなっていた。初日の慣れない土地での緊張のせいか生徒の顔にもやや疲れがでているようであった。しかし、本日のメインイベントである実技指導を受けるべくグランシヨミエール美術学校へ向かった。講師の方が丁寧に指導(通訳の方もついていただいた)していただき、貴重な体験をさせていただいた。デッサンの方法も模範だけで捉えるといったように少し趣向をこらしたやり方で実習を行ったため、新たな視点を養うことができた。さすがに、講習を終えホテルに到着する頃には疲労も蓄積しているように見えたが、ホテルでのおいしい夕食とデザートで明日への英気を養っているようだった。



寺院内では、観光客に関係なくミサが行われていて、宗教心の高さを感じないではいられなかったし、高くそびえる天井ははるか天空を目指して作られ、荘厳な空間を作り出すためになくてはならないものだったのだと感じた。



ポンピドゥーセンターは、20 世紀初頭の現代美術の先駆けとなる作品を鑑賞することができる。建物も斬新で、美術館自体も天井が高く、現代美術の作品を展示しやすい展示空間となっている。スーパーモノプリでは、現地の人になった気分を味わって日用雑貨を購入することができた。

12 月 7 日 《研修 2 日目》

- ◆ルーブル美術館
- ◆ノートルダム寺院
- ◆ポンピドゥーセンター
- ◆モノ・プリ



2 日目、今日も天気は快晴に恵まれ、渋滞に悩まされることなく定刻にルーブル美術館に到着することができた。夢にまで見た美術館の見学とあつて、生徒も気持ちが高揚して仕方がないという様子だった。しかし、こういったヨーロッパ旅行においては、浮ついた気持ちが事故やトラブルにもつながりかねないので、ルーブル美術館はセキュリティが高いとはいえ、改めてスリや置き引きに注意するように促した。ガイドの方がエジプトからギリシャ、ルネサンスからバロックそして新古典主義あたりまでルーブルに所蔵されている主要作品を簡潔に解説していただいたので、時間の節約になった。昼食をはさんで残りの時間は自由に館内を散策した。生徒たちは事前に所蔵作品を調査していたので、マップを片手に見たい作品を足早に見て回っているようだった。到底限られた時間で全ての作品を鑑賞することはできないが、食事の時間を惜しみながらできるだけ多くの作品を目にやきつけているようだった。記憶に残るのは僅かかもしれないが、再び、この地を訪れ、もう一度この目で見たいと自身を鼓舞するきっかけになればと願う。その後、市役所の近くまでバスで移動し、そこから歩いてノートルダム寺院、ポンピドゥーセンターと徒歩で移動した。ノートルダムはその荘厳さから信仰心の高さに圧倒されたし、ゴシック建築を代表する壁一面の彫刻は、見る者を果てしない創造の時間の渦へと誘った。さらにポンピドゥーセンターは、これまでの古典絵画やゴシック建築とうって変わって現代美術につながる 20 世紀初頭の美術を鑑賞することができ、急速に変化を遂げた現代美術の変容を体感することができた。建物も 1977 年に建てられたとは思えないほど古さを感じさせない斬新なものだった。ホテルへ向かう途中でモノプリという現地のスーパーに立寄り、お土産店では購入できないような現地の日用品などを購入することができ、生徒自身は大満足しているようだった。

全てが感動。



名物のオムレットは、この地へやってくる巡礼者の長旅の疲れを癒すためにもてなされたものだという。味付けは薄味だがふわふわした舌触りは何ともいえない食感である。城の麓は所狭しと土産店が軒を連ねている。当時は小学校もあったというからにぎわいとしては当時のままなのかもしれない。



12月8日《研修3日目》

◆モン・サン・ミッシェル

岩山を削りながら作られた古城は、その美しさだけでなく、かつては要塞としての役割も担ってきた。回廊、水道、エレベーターなど生活に必要なインフラを機能的に配置しているところもすごい。



永い年月を経て建設された教会は、ロマネスクとゴシックの二つの様式が混在していて歴史の深さを感じる。

海に浮かぶ聖地

パリでの研修4日目は、パリから西へ340キロ離れた巡礼地モン・サン・ミッシェルへ向かった。鹿児島島の土地感覚におきかえると日帰りで福岡に行くような感覚である。当然高速道路を使用するのだが、距離が距離だけに移動だけで約5時間くらいかった。早朝に出発し、お昼過ぎの到着となった。名物のプレインオムレットを食べ（やや薄味なのは良いがふわふわ感は泡を食べべているような感じだった）、いよいよ電気駆動のシャトルバスで島のほうへ向かった。城壁から中へ入るといかにも観光地といったにぎわいで土産物屋が軒を連ねていてこのハリーポッター城を彷彿とさせた。（こちらが本物なのだが）早速現地のガイドの方の案内で場内を散策した。現在は教会と観光施設に努めていらつしやる方が通動している（ここに住んでいる人は殆どいない）が、陸続きになる前は教会関係者がここで寝食を行っていたし、麓のほうは、小学校も存在する一つの集落だったという。感覚的には、麓から頂上の教会入り口まで約30分はかかるので、高低差もさることながら島自体もかなり大きい。建材を運ぶことが非常に困難なため、建築には長い年月がかかり、教会内部の構造もロマネスク様式とゴシック様式が入り交じる形で建設されていて教会建築様式の学習においては非常に興味深い。また、パリとは異なる現地の特産品も販売されていて中日の研修としては丁度よい行程となった。しかし、移動に時間を要するため、フオンテーヌブローのホテルに到着したのは10時過ぎとなった。ただ、生徒にとってはここ2日間歩きっぱなしの美術館巡りが続いたため、バスでの移動は、よい休息でもあったように思う。



バルビゾン派の画家たちが好んで描いた農村地帯は町並みも含め当時の面影を残していた。画家たちはこの地に滞在しながら、自然とともに生きる質素ながらも力強い農民の生活を真摯に見つめながら、なんとか作品に表そうとしていたのだと思う。

ミレーのアトリエに入ると作家の息吹を感じないではいられない。ミレーがここで絵を制作しているのを想像すると、キャンバスの布目と筆がこすれる音が聞こえてきそうに思えた。



12月9日 《研修4日目》

- ◆ミレーのアトリエ
- ◆バルビゾン派美術館
- ◆フォンテーヌブロー城
- ◆シャルルドゴール空港→羽田空港



フォンテーヌブロー城前にて。今回の研修旅行では最後の集合写真となった。生徒達の笑顔が今回の研修旅行の充実ぶりを物語っていると思う。

今日は、バルビゾン派の活動の痕跡をたどるべくフォンテーヌブロー周辺での研修を行った。地理的にはパリから南方へ60キロ離れているのだが、周りが森ということと若干高地ということもあり、パリよりは寒さが厳しく感じられた。最初に向かったのはミレーが埋葬されている墓地。近くには「晩鐘」の舞台となった教会があり、周辺は広大な穀倉地であるらしく、早朝の赤土の上を歩くと霜柱がばりばりと音を立て、周囲からはほのかに肥料のように朝もやの中に漂ってきた。20分程バスで移動し、ミレーのアトリエとバルビゾン派が利用していたとされるガソリン夫妻に宿屋（現在は、バルビゾン派美術館となっている）を見学した。2つの施設も予想通り5メートル四方のやや狭い部屋が多かったので2グループに分かれての見学となった。ミレーのパレットや当事の画家の生活等を垣間みることができたので、バルビゾン派の息吹のようなものを感じられたし、農村地帯を散策すると彼らが好んでこの地を訪れた思いに共感することができた。昼食をすませたあとは、フォンテーヌブロー城を見学し、マニエリスム建築様式を鑑賞すると同時に、ナポレオンの遺品の精巧な作りで当事の技術力の高さとナポレオンの権威の大きさを感じないではいられなかった。計画では庭園内でのスケッチも計画していたが時間的にあまりゆとりがなく落ちていてスケッチできている感じではなかったようだ。しかし、出国手続きや荷物検査のことを考えると空港へ定刻に到着することを最優先するために名残惜しく感じたが足早に宮殿を後にした。

（上木原 堅二）

いよいよ最終行程。



編集後記

「松濤33号」を発行することとなりました。
一昨年度から紙媒体に代わりまして、ネット上での
PDFファイルによる公開という形となっています。
松陽高校ホームページからの閲覧と必要に応じてプリント
していただくことで、より簡便にご利用いただけるもの
と思います。

ご執筆いただきました先生方や、ご協力いただいた方々
に深く感謝いたします。

不備な点はなにとぞご容赦いただき、ご高覧いただきま
すようお願い申し上げます。

松 濤 第33号（平成29年3月）

発行者 鹿児島県立松陽高等学校

校長 新 納 雅 樹

発行処 鹿児島県立松陽高等学校

〒899-2702 鹿児島市福山町 573 番地

TEL099-278-3986
